

Japan
Audio
Society

JAS journal

平成 30 年 1 月 1 日発行
通巻 450 号
発行 日本オーディオ協会

2018
Vol.58 No.1

1

○ 新しい年を迎えて「大きな時代の転機か」

会長 校條 亮治

【2017 年「音の日」特集】

○ 第 24 回「音の日」のイベントと第 22 回「音の匠」顕彰についてのご報告

森 芳久

○ 響きとともに - 音響にかかわってきた半生を振り返って -

豊島 政實

○ 日本オーディオ協会賞選考授与を終えて

会長 校條 亮治

○ 第 4 回学生の制作する音楽録音コンテスト報告

高松 重治

○ Roma hi-fidelity 2017 見学レポート

井谷 哲也

○ 新春特別コラム「真空管アンプに人生を賭ける男」

森 芳久

【連載：Who's Who ～オーディオのレジェンド～ 第 6 回】

○ 輝かしきキングレコード録音史 菊田 俊雄さん（その 1）

照井 和彦 JAS 事務局長

【見たい聞きたい行きたいレポート】

○ アナログレコード用ラッカー盤カッティング その 2

JVC マスタリングセンター

照井 和彦 JAS 事務局長



一般社団法人

日本オーディオ協会





(通巻 450 号)

2018 Vol.58 No.1 (1 月号)

発行人：校條 亮治

一般社団法人 日本オーディオ協会

〒108-0074 東京都港区高輪 3-4-13

電話：03-3448-1206 FAX：03-3448-1207

Internet URL

<http://www.jas-audio.or.jp>

C O N T E N T S

・新しい年を迎えて「大きな時代の転機か」	会長 校條 亮治	P3
【2017 年「音の日」特集】		
・第24 回「音の日」のイベントと第22 回「音の匠」顕彰についてのご報告	森 芳久	P7
・響きとともに - 音響にかかわってきた半生を振り返って -	豊島 政實	P12
・日本オーディオ協会賞選考授与を終えて	会長 校條 亮治	P25
・第4 回学生の制作する音楽録音コンテスト報告	高松 重治	P28
・Roma hi-fidelity 2017 見学レポート	井谷 哲也	P32
・新春特別コラム「真空管アンプに人生を賭ける男」	森 芳久	P41
【連載：Who's Who ～オーディオのレジェンド～ 第6 回】		
・輝かしきキングレコード録音史 菊田 俊雄さん（その1）	照井 和彦 JAS 事務局長	P45
【見たい聞きたい行きたいレポート】		
・アナログレコード用ラッカー盤カッティング その2	JVC マスタリングセンター	照井 和彦 JAS 事務局長 P53

1 月号をお届けするにあたって

例年にないほどの厳しい寒さが続いておりますが、本年も JAS ジャーナルへのご支援、ご愛読をよろしくお願い致します。大変残念なお知らせですが、昨年末、元 JAS 会長でデジタルオーディオの父ともいべき中島平太郎氏が逝去されました。心より御冥福をお祈りいたします。

今月号では先ず校條会長からの年頭のご挨拶を掲載いたしました。時代の変化と JAS の今後等についても述べていただきました。

昨年 12 月 6 日に行われた「音の日」を特集し、当日のイベントと「音の匠」顕彰について森実行委員長に報告していただきました。音の匠に選ばれた豊島 政實氏には「響きとともに」と題した記念公演の内容を寄稿いただきました。同時に開催された「学生の制作する音楽録音コンテスト」について表彰式の様子も含め、審査員を務めてもらった高松氏に報告していただきました。

昨年 11 月に行われた「Roma hi-fidelity 2017」見学レポートを、パナソニックの井谷氏に寄稿いただきました。ちょっと珍しいイタリアでのフェアの様子をご覧ください。特別コラムとして森氏に A&M 社長の三浦篤氏の紹介記事を寄稿いただきました。真空管アンプにかける三浦氏の情熱が伝わってくる記事かと思います。

連載「オーディオのレジェンド」は第 6 回、元キングレコードの菊谷氏へのインタビューを照井事務局長にまとめてもらいました。また「見たい聞きたい行きたいレポート」では JVC マスタリングセンターを訪れました。

☆☆☆ 編集委員 ☆☆☆

（委員長）君塚 雅憲（国立科学博物館）

（委員）穴澤 健明・稲生 真（（株）永田音響設計）・遠藤 真（NTT エレクトロニクス（株））

大久保 洋幸（NHK 放送技術研究所）・高松 重治・春井 正徳（パナソニック（株））・森 芳久

八重口 能孝（オンキヨー&パイオニアマーケティング（株））・山内 慎一（（株）ディーアンドエムホールディングス）

山崎 芳男（早稲田大学）

新しい年を迎えて「大きな時代の転機か」

一般社団法人日本オーディオ協会

会長 校條 亮治

皆さま、明けましておめでとうございます。これまで何回この年明けを見てきたことでしょうか。その時間も、場面も同じ日は1回としてなかったはずですし、これからも起こり得ません。それが時間であり自然であるからです。さて今年は一体どんな年になるのでしょうか。

その前に何と言っても中島 平太郎氏を想わざるを得ません。



■ 中島 平太郎氏逝く

当協会の元会長であり会友でもあった中島 平太郎さんが、去る平成 29 年 12 月 9 日（土）午後 1 時 44 分に急性心不全のために亡くなりました。享年 96 歳でしたがつい最近まで自ら立ち上げられた「NH ラボ株式会社」の講演を精力的にこなされていました。CD を世に送り出し世界普及を見届ける暇もなく、次は CDR を世に送り出すべく「株式会社スタート・ラボ」を立ち上げ、さらには「ビフレストック株式会社」の立ち上げにも関与し、最後まで顧問を務められました。こよなく良い音への追及にこだわり、音楽、良い音を愛する人たちとの交流を通じ、オーディオ人財の育成を最後まで続けられ、まさにオーディオとデジタルに人生を捧げられました。

私は今でこそ会長の立場にありますが、中島さんはとても近寄れるような方ではなく雲の上の方と思っていました。遠くでお目にかかる方と思っていましたが幸か不幸か会長になり、御挨拶後も何かとご相談にお伺いさせて頂きました。

お会いをし、お話をさせて頂いた結果はこれまでの私の想像とは全く違うものでした。大変気さくな人柄であり、一方では少年の様な方で私の稚拙な話に本当に熱心に耳を傾けて頂きました。印象に残った話は「ヘッドホンの頭外定位への取り組み」、「音場の重要性」とそれに対して同感の意を頂いたこと、そして何とんでも「CD 時代の次」を問われたことでしょうか。

自ら CD を生み出しながら、その次をお考えであったことは恐ろしい探求心であると改めて思うことしきりです。また今日のスマホ時代を予測し、「パーソナルオーディオ」が主流にならざるを得ないとまで言い切っておられましたことは全くその通りになってしまいました。

しかし、一方で音のクオリティーを追求する立場から 1/f の揺らぎを提起研究し、黄金率の「卵型スピーカー」の開発を行い、試聴用に三菱電機のダイヤトーン「2S-305」が会社においてあった、このギャップの大きさに驚いたり吹き出したりとなんとも不思議な方であると思ったりしました。協会創立 60 周年では「日本オーディオ協会栄誉賞」を贈呈し、長年のご活躍とご労苦に報いましたが返礼でいたずら少年のような目で早く「CD の次」の答えを出せと宿題を出されたことが昨日のように思い出されます。まだまだご指導を頂かねばならない状況ですが、何とか「次世代オーディオ」として「ハイレゾ・オーディオ」の世界スタンダード化が中島さんへの最後のご報告としてできたことは喜んで頂けたと自負するところです。

中島さん、本当に長い間のご指導を頂き有難う御座いました。天国で良い音楽を良い音で思う存分に奥様とお二人で楽しんでください。



「日本オーディオ協会栄誉賞」授与式での中島 平太郎氏

■ 時代の転機

今、世界の最先端ではこれから起きることすら予測が出来る時代が来たと言ってはばかりません。それはビッグデータ、IoT、AI に代表される時代であると言えます。確かに、デジタル技術や関連技術の進化により、私たちを取り巻く状況は予想ができない早いスピードで変化をしています。技術が生活慣習を変え、ビジネスモデルや働き方をも大きく変えるであろうことは容易に察しがつきます。私達人間にとって労苦が伴う仕事、危険や困難な仕事をロボットなどに置き換え生産性を上げることがこれまでの有り様でした。これからは、そればかりか私達人間が考えるべきこと、創造することすら置き変わる可能性を示唆しています。

■ 次世代に必要なこと

時代は大きく変わろうとしています。そして国内ではこれまで指摘したように「少子高齢化」の結果、所謂「労働生産年齢（15 歳～64 歳）人口比率」が大きく減少します。総務省発表の「平成 26 年版我が国の労働人口」によれば、労働生産年齢人口は 2015 年（7682 万人）が 2045 年には（5353 万人）と▲2329 万人（2015 年比 30.3%）の減少予測となっています。これだけ生産年齢層の減少があつて国内総生産である GDP が減らない方がおかしいと考えます。しかし政府は減るどころか増やすと言っています。そして今頃になって働き方改革やら教育費無償化等と言い出していますが今更の感があります。これまで歴史上国民が減少して栄えた国は有りません。これには異論もあつて「産業革命」だとか「イノベーション」があれば栄えるという学者の論がある事も事実ですが、過度に発達した資本主義経済下においては残念ながら今日までそ

の結果は出ていません。また、「栄える」ことの定義が必要です。政府はこれまで「女性と高齢者の活躍」が重要と言ってきましたが今日の政策と裏腹の感もあります。

では、本当に次世代に必要なことは何でしょうか。「イノベーション」というなら何をイノベーションするかを明確にしなければなりません。「イノベーション」というと単純にサービス業の労働生産性を上げれば良い、との指摘がありますが下手をすれば顧客満足度を落とせば上がるという間違った方向になりかねません。もう一つは人材育成ではないでしょうか。それは教育費無償論とは違います。教育と言ってもどのような人材が必要か明確にしていなければなりません。

さらに重要なことは発想の転換が必要であることです。GDP 総額を増やすことよりも一人当たりの労働生産性を増やすと言うなら明確です。この様に本来あるべき姿が提起されないまま今日を迎えているように思われます。

■ 次世代の協会に必要なこと

次世代協会運営に必要なことは、第一に次世代のオーディオ市場の行く末と現在を冷静に見る目を養うことです。広範な技術進化の行方、若者を中心とした生活スタイル変化の行方、氾濫する情報から本物を見極める力、真に顧客が望むモノは何かを探る「顧客インサイト」の力等マーケティング力を高める必要があります。マーケティング無しに先進市場の取り込みはあり得ません。第二は戦略性の磨きこみです。これは協会が「すべきこと、できること」の選択をすることです。そして協会資源は有限です。「捨てる力」を持つことも重要です。今すべきこと、将来絶対に必要なことへの柔軟な対応力です。これらを整理すると、第一は人材の育成ではないかと思えます。この時の人材育成では「市場啓発」を含みます。そして第二は会員企業の奮起一番、独自性の強い商品を市場に送り出す力です。この二つは協会執行部を含む会員企業の経営者の大きな責任と思われます。さて我々は来期にはどこまで迫れますか。スマートスピーカーなどはオーディオでは無いなどと言っているのは世界のスピードにはついていけません。一方で慎重に考えねばならない時が時代の転機の宿命でもあります。特に技術と自然、倫理の関係、そして価値観の問題です。

■ 技術は自然を超えられるか、超えてよいのか

報道によれば米国マッキンゼー社は 2025 年までに世界で 1 億人以上のホワイトカラーの仕事を自動化ソフトと言われる一種のロボットが代替すると予測しています。ビッグデータの分析活用によっては人間が考えるよりはるかに的確に次なる行動を予測してくれるかもしれません。個人的には受け入れ難いのですがクローン人間を生み出す事すら、いとわなくなってしまうのでしょうか。そして「感性価値」の代表でもある作曲や作詞などもいとも簡単にヒット曲を提供してくれるかもしれません。

■ 感性価値と不確実性の重要性

オーディオ業界も次世代オーディオとして「ハイレゾ・オーディオ」を導入して早 3 年が過ぎ、お陰様でスタンダードになりました。しかし、理念である「録音と再生のあくなき追求」はまだ道半ばと言わざるを得ません。いや逆に「感性価値」は劣化しているかもしれません。私は不確

実性があるからこそ「感性価値」は磨かれるのではないかと思います。やはり越えられない壁と超えてはいけない倫理と理念があるからこそ「夢と感動」があるのではと思う年頭です。

中島 平太郎さんや先輩諸氏が追いつけたものは何であつたろうかに想いを馳せながら、今年も「夢と感動」に向かって臨みたいと思います。

どうぞ皆様の温かい叱咤とご支援をお願いして年頭のご挨拶とさせていただきます。

特集：2017年「音の日」

第24回「音の日」のイベントと 第22回「音の匠」顕彰についてのご報告

「音の日」実行委員長 森 芳久

昨年また、12月6日「音の日」が目黒の雅叙園に於いて盛大にそのイベントを開催し、おかげさまで一昨年よりさらに多くの方々にご参集いただき、文字通り大成功裏に終えることができました。第24回を数える2017年度の「音の日」の特筆すべきことは、例年に比較して学生など若い方々の参加、そして女性の姿が目立ったことです。これは「音の日」が確実に一般にも浸透していることの表れでもあり、担当者はもちろん協会にとっても非常に喜ばしい変化でした。

ご参集いただきました皆様、またこのイベントにご協力いただきました業界団体各位、そして関係者の皆様にこの場を借りて改めて厚く御礼申し上げます。



昨年は日本オーディオ協会創立65周年記念の年でもあり、「音の日」の特別イベントとしてサウンドエンジニア深田 晃（ふかだ あきら）氏を講師にお迎えし「CD 前夜からハイレゾまでの録音制作」と題した記念講演をお願いいたしました。

深田氏は、音楽録音の世界で長年に亘り数々の名録音作品を制作されてきた、文字通り国内屈指のサウンドエンジニアです。これまでに CBS/ソニー・レコード（現ソニー・ミュージックエンタテインメント）や日本放送協会（NHK）のハウスエンジニアを歴任され、現在フリーランスとしてご活躍されています。

講演では、アナログからデジタルへの大きな技術のパラダイムシフト、さらに現在のハイレゾ録音までの録音制作の歴史と進化、録音機材の変遷、さらにはご自身の実体験からのマイクアレ

ンジの詳細、セッティングのノウハウなど貴重なお話を披露していただきました。これからサウンドエンジニアを目指す人はもちろん、オーディオ製品開発やオーディオ愛好家にとっても大変有意義な講演で、まさに日本オーディオ協会 65 周年「記念講演」に相応しいものでした。



深田 晃氏の記念講演

また、65 周年という節目に「日本オーディオ協会賞」の受賞式も行われました。この賞は 1986 年に創設され、5 年ごとに「オーディオ技術の開発および実用化に大いに貢献した個人、また組織の顕彰」を行うものです。

昨年は、

- 1) 「ハイレゾ・オーディオの提唱と推進」に貢献したソニービデオ&サウンドプロダクツ株式会社。
- 2) 「ハイレゾストリーミングサービス PrimeSeat」の開発および運営に貢献した、株式会社インターネットイニシアティブ、株式会社コルグ、有限会社サイデラ・パラディソ、ソニー株式会社。
- 3) 「ブランド復活と市場活性化の推進」で業界を活性化した、パナソニック株式会社アプライアンス社ホームエンターテインメント事業部。
- 4) 「CI とブランド戦略による市場活性化」を成功させた、株式会社 JVC ケンウッド。
- 5) 「ブランド戦略による組織を超えた事業強化」に成功した、三菱電機株式会社。

以上 5 の案件、計 8 社の組織が顕彰されました。



協会賞を受賞された 8 社の代表の皆さん



「音の日」の恒例イベント「音の匠」顕彰式では、長年に亘りスタジオ機器や建築音響の研究開発・設計を手がけてこられた、四日市大学名誉教授で株式会社豊島総合研究所所長の豊島 政實（とよしま まさみ）氏が平成 29 年度第 22 回「音の匠」として顕彰されました。

豊島氏は、1964 年日本ビクター株式会社 音響技術研究所入社後、一貫してスタジオ機器や建築音響の研究開発、

設計業務を続けられ、2000 年同社を定年退職後は株式会社豊島総合研究所を設立、四日市大学で環境情報学部教授としても活躍されてきました。氏は、国内はもちろん世界各国の著名スタジオの音響設計を手がけられ、主なものに英国アビーロードスタジオ、米国ルーカスフィルムスコアリングステージスタジオ、中国上海 TV スタジオ、国内ではビクタースタジオなどなど枚挙に遑がありません。

豊島氏の設計したスタジオには、録音エンジニアやアーティストから一様に「響きが良い」と好評で、その評価が正しいことは業務用スタジオのみならず、エンヤ、スティング、ジョージ・マイケルなど数多くの著名アーティストのプライベートスタジオが豊島氏設計のものであることから良く判ります。

顕彰式では、日本オーディオ協会の校條会長より表彰状、顕彰楯、そして株式会社電波新聞社代表取締役社長平山 勉（ひらやま つとむ）様より記念品の贈呈が行われました。



「音の匠」顕彰式での豊島氏（中央）、平山電波新聞社長（左）、校條会長（右）

顕彰式の後、引き続き行われた「音の匠」特別講演会『響きと共に』では、豊島氏がこれまで手がけられた数々のスタジオに関するエピソードはどれもが興味深いお話で、特にアビーロードスタジオの改修工事とビートルズにまつわる秘話は聴衆者の心を強く捉え、パーティー会場でも豊島さんの周りには多くの人が集まり質問の嵐が吹き荒れていました。(詳しい講演内容は本号の豊島氏の投稿をご覧ください)



特別講演でスピーチする豊島氏

ご好評いただいております「学生の制作する音楽録音作品コンテスト」も2017年度は第4回を迎え、今回も質の高い作品の応募が増え、若い世代の活躍ぶりを感じさせてくれました。(詳しい内容につきましては「音の日」実行副委員長高松 重治氏による本号次項の「学生の制作する音楽録音作品コンテスト」をご覧ください)



若い活気に大いに盛り上がった「学生の制作する音楽録音作品コンテスト」表彰式

そして「音の日」の締め括りは恒例の「音の日つどいパーティー」です。昨年は例年よりも若い方々の姿が目立ち、また多くの方々に参加していただき、和やかな中にも活気溢れた集いとなりました。

また、経済産業省からのご来賓として、商務情報政策局コンテンツ産業課課長補佐の伊藤 圭(いとう けい) 様のご参加をいただき、冒頭のご挨拶でオーディオ業界に対する大きな期待と力強いエールを送っていただきました。

この席でもまた、第22回「音の匠」顕彰者、「学生の制作する音楽録音作品コンテスト」受賞者の紹介、そして第24回「プロ音楽録音賞」受賞者の紹介などが行われ、会場は終始和やかな雰囲気に包まれていました。

以上、2017年度「音の日」の催しについて、簡単にご紹介いたしました。尚、それぞれの主なイベントについては続く別項で詳しくご紹介いたしましたので、是非そちらも併せてご覧ください。



多くの方々が参加した「音のつどいパーティー」

特集：2017年「音の日」

響きとともに

- 音響にかかわってきた半生を振り返って -

四日市大学 環境情報学部 名誉教授
豊島 政實

昨 2017 年のエジソンが蓄音機を発明した日と言われる 12 月 6 日の音の日に「音の匠」として顕彰して頂きました。大変名誉なことでオーディオ協会及び関係の皆様へ深く感謝いたします。これからも益々この音の道を究めるべく精進する所存です。

ここに当日の講演内容を、又話しきれなかった事柄も含めて記して行きたいと思います。

子供の頃からのオーディオマニア

まず私と“音”の関わりから、話を進めたいと思います。

私の両親は音楽好きで特に父親はドイツの工業機械会社に勤めていて、大変な音楽好きでクラシックを中心にジャズ、タンゴと幅広くレコードを収集していました。私は幼い頃から自然にレコードに親しんでいました。レコードは SP レコードでシェラックと言う虫から作られる材料で製造されたもので瀬戸物のように落とすと割れるようなものでした。再生機は電蓄（電気蓄音機）と言われるビクターのビクトローラで出力管は 2A5 でした。シングルでしたが今思いだしてもなかなか良い音で鳴っていました。天板を開けるとビクターの犬のマークが目に入り、このニッパのマークとも自然になじんでいました。後ほどの話になりますがこのマークと一生かかわりがあるとは当時は夢にも思っていませんでした。小、中学時代は鉱石ラジオから並 4 やスーパー、高校になるとアンプやスピーカーボックスの自作に夢中になっていました。無限大バッフルを作ると言って押入れをスピーカーボックスにしてその効果に満足していましたが、あるときスピーカーボックスを友達の家を持って行って聞くと音が違って来ることに気が付き、やがて音に対して部屋の影響が大きくかわることが分かってきました。高校生の知識ではどうしても音（特に建築音響）についてもっと勉強したいと考えるようになりました。

人生の師

ここで私が人生で大きく影響を受けたいわば「人生の師」についてお話したいと思います。それは学生時代と、その後入社した会社で、また会社の外でご指導いただいた方々についてです。学生時代は早稲田の伊藤 毅教授の研究室に入り音に対する基本から応用までを叩き込まれました。企業（日本ビクター）では直属の上司であった藤本 正熙常務その後の上司 NHK 技研から来られた富田 義男常務、研究所トップの井上 敏也専務、更に会社の外で（株）永田音響設計の永田 穂先生と芸能山城組主催の山城 祥二こと大橋 力先生、これらの方々には音のみでなく、あらゆる面でご指導頂くとともに大変お世話になりました。大学と会社についてはこの後お話いたしますので、まず会社の外でご指導いただいたお二人について述べたいと思います。永田先生には音響設計業務をどのようにして行うかその実施を“日本音響コンサルタント協会”を立ち上げて我々に教えて下さいました。またホールなどの音響仕様を確立されると同時に会員である我々音響設備会社がホールに拡声システムなど納入した時、音響測定をするための測定用音源 CD の製作を提案されました。私もその一端を任せられ測定用の信号系を担当しました。プロのエンジニア若林 俊介氏、及川 公生氏などの協力、会員各社、NHK、オーディオ協会の支援を得て CD は完

成しました。その後ほとんどのホールの測定にこの CD が使われてデファクトスタンダードとなりました。先生は会員各社がお互いに競争しながらもレベルを上げるよう業界の発展に尽くされました。

芸能山城組の主宰者山城 祥二こと大橋 力教授は CD 誕生の頃にすでに、今でいうハイレゾの必要性を訴えていました。先生はご自身でビクタースタジオにおいて不朽の名作“恐れ山”などの LP レコードを製作されましたが、その LP が CD に代わった時異変を感じました。LP の時に有った艶やかさ、色気みたいなものが無くなっていたのです。その原因を CD の 20kHz でカットされたその帯域にあることを発見し、音楽(音)には更に高い帯域まで含む必要があると 20kHz 以上の高帯域を含む音を収録、それをハイパーソニックと命名しました。今のハイレゾを CD が出てすぐに提案されていたのです。更に、このハイパーソニックには脳を活性化する効果があることを発見、1991 年アメリカの AES に発表、2000 年にアメリカ生理学学会論文誌に発表、センセーションを起こしました。私は 1991 年先生から放送大学のスタジオの設計を依頼されました。

その時聴かされたのが早稲田の山崎教授製作の 1 ビットデジタル録音機による 20kHz 以上の音を豊富に含んだ熱帯雨林の音でした。CD 相当の再生音と比較して、その音は明らかに滑らかで透明感があり奥行まで見えるように感じて驚愕したものです。この時、私は、音は理論だけでなく実際に聞くことが大事であることを教えて頂きました。その後 30 年にわたり今日まで先生には音に関する事のみでなく、あらゆる事で御世話になりご指導頂いています。

早稲田大学音響研究室（音研）

伊藤 毅先生の師でもあり義父でもある早稲田大学の黒川 兼三郎教授は東北大学の抜山 平一教授等と、ハーバード大学に留学しケネリー教授の下で電話の受話器など音響の研究をしていました。その後それぞれの大学に戻り日本の音響学の立ち上げに大きな貢献をしました。そのハーバード大学のケネリー教授があのエジソン研究所でエジソンの理論的バックアップを担当していたケネリーだったのです。この早稲田の音響研究室（通称、音研）がエジソンの流れをくむということについて伊藤先生は一言も仰らなかったのが我々も知らなかったのですが、後になって電電公社、電気通信研究所長（当時）の早坂 寿雄先生の書物[1] などから知ることになりました。この早稲田の音研には奇人変人が大勢いましたが、皆さん優秀で、戦後日本の音響界を背負っていた方も多数おいでになりました。

また研究室はデンマーク、ブリュエル・ケアー（B&K）社の最先端の音響測定器を所有してスピーカーの周波数特性、高調波歪、インピーダンス特性などの測定が出来た上に、当時では数少ない無響室をも所有しておりました。我々はラジオ技術誌などの依頼によりメーカーのスピーカーを測定し、比較して紙面で発表などしていました。一方当時は各県や都市でホールの建設が始まり、先生に音響設計の依頼が殺到しました。我々は手分けして遮音計算、残響計算を行い、いつの間にかホール設計のノウハウを身に着けるようになりました。精度の高いポータブル測定器がなかった時代あの重い B&K の測定器一式を札幌まで運んでホールの音響特性を測定したことも今では良い思い出です。また週一で上級生とともに、モースなどの英文の原書での輪講が開かれており、今考えてもかなりレベルの高い勉強をしていました。先生には大学院も含めた 6 年で音の理論から現場での実施応用まで幅広く、手取り足取り教えて頂きました。学部の時か

ら学会での論文発表をさせられ度胸を付ける教育を受けました。更に「君たち世の中の仕組みをもっと分かっていなくては駄目だ」と何と学会発表の座長を先生の代役で任されたことがありました。

電気通信学会（当時）の音響分科会でしたが、私が座長を任された時の発表者は、後に日本ビクターで私の上司となる井上専務（当時は課長）とやはり上司になった富田常務（当時は NHK 技研）でした。これも何かの巡り合わせのような気がします。今年 2018 年 5 月 3 日は伊藤 毅先生、生誕 100 年となります。我々お世話になった OB が中心になってプロのピアニストである先生のお嬢さんと先生の従弟であるジャズピアニストの山下 洋輔氏との生誕 100 年記念セッションを開く計画を立てています。

日本ビクター入社

就職に関しては、一般募集もありましたが当時は教授が会社にゼミ生を紹介することが多く、私も修士課程修了の 1964 年、日本ビクターに行くように言われました。幼い頃から慣れ親しんでいた犬のマークの会社に就職できたというのは大きな喜びでした。横浜の研究開発本部に勤務することになり藤本技師（後に常務）の下で研究開発を行うことになります。藤本技師の上には白石次長、井上部長（前出）がおられ、この、お三方には大変お世話になりました。又音響担当常務として NHK 技研から来られた富田 義男先生（前出）がおられました。また本部長はあのテレビの発明者”イロハのイ”の字 “で有名な高柳 健次郎先生（後に副社長）でした。

当時ビクタースタジオが築地から現在の千駄ヶ谷に移転するにあたり建築から録音用機材まで基本構想は研究開発部とスタジオでまとめ上げました。スタジオ側にはほとんど同時入社の苦米地 義久課長（現在プロのサックス・プレーヤー）がいて毎晩のように一杯やりながら議論していました。

ステレオが定着してきた当時、日本にはまだスタジオに関するノウハウが十分ないので、レコーディング先進国であるアメリカの情報収集のため井上部長、白石次長の計らいで入社 3 年目の私にニューヨークで開催される AES への参加とニューヨーク、シカゴ、ロスアンゼルスのある RCA スタジオを中心にスタジオの視察をして来るよう 2 週間の出張命令が下されました。

この初めてのしかも一人での海外視察はこれからの人生に大きな影響を与えるものでした。百瀬社長に挨拶に伺ったとき「機材の償却方法を調査してこい」と宿題を出されました。この調査の結果アメリカにはリースと言うものがあり条件によっては税法上有利だと知りました。日本にはまだ録音用機材のリースの概念はなくリース会社も存在していない頃です。

ニューヨークの RCA スタジオに行くと技術課長のジョン・アーゴ（日本語ではジョン・イーグルと発音：後の AES 会長）がスタジオを案内してくれました。初めて見るアメリカのスタジオは大変刺激的でした。次に印象に残った点の幾つかを挙げてみます。①日本では見られない背の低い衝立、実際効くかどうか疑問に思いましたが、場合によっては、ほん一寸の遮音で十分と言うノウハウがあることを教えてもらい、レコーディングの奥の深さを知りました。②ドラムスの遮音にはかなり神経を使って、プレイヤーの上に厚くキルティングした大きなパラソルを立ててドラムの音が飛び散るのを防いでいましたが、これには感心して後のドラムブースの構想に役立ちました。③機材に関しては多くが自社スタジオ製でコンソールのモジュール化を既に始

めていてトランジスタや RC をエポキシで固めたブロックをインテグレイテッド・サーキット (IC) として実用化に入っていました。見るもの聞くもの、皆初めてのものばかりで、これに追いつくにはかなり時間がかかるぞ、との印象を持ちました。スタジオはややデッドでしたが当時流行のフルバンドの収録は近くのライブなボールルーム、ロブスターホールを使用し、アンペックスの 4CH テープレコーダーによるマルチマイクレーコーディングで録音していました。

ニューヨークの後、シカゴ、ロスアンゼルスと各地の RCA スタジオを中心にスタジオ見学を続けましたが、現在のビクタースタジオには、このアメリカで吸収したノウハウが幾つも入っています。

1970 年大和市に音響技術研究所が完成し藤本常務から富田常務傘下となり富田研究室の長としてスピーカー、マイク、建築音響の研究開発に明け暮れました。富田常務は学究肌で社内では週一回、室員 5、6 名で輪講を行い音響工学の指導にあたられていました。NHK 技研時代から厳しい人柄で知られており、この輪講でも一寸詰まったりすると、「君は土日いったい何をしてたんだ」と、厳しく叱責されます。学会などでは最前列に陣取り若手の研究員や技術者の論文に対して容赦なく鋭い質問をぶつけることでも有名でした。度々発表者から「豊島さん、もう少し抑えるように言って下さい」と頼まれましたが、うっかりそんなことを言うと、今度はこちらに雷が落ちてきます。NHK 技研時代富田部長（当時）の下におられた方々から「よくあの人の抱持を 10 年も務めたナア。表彰状を出してあげようか」と憐れみと称賛の交じり合ったお言葉を頂きましたが、私自身はこの 10 年間は苦しいこともありましたが、色々なことを勉強できた貴重な 10 年間だと思って感謝以外のものはありません。

やがて研究所が組織変更になり、井上専務から「君たちの今までの研究の成果として利益に結び付けるために設計事務所をやれ。うまくいったら青山に事務所を出してやる」と言われて、1977 年大和の研究所の中に独立採算の設計事務所“日本ビクター音響設計事務所”を設立しました。

幸いなことにその後ビクタースタジオの改修計画が出てきて、その設計を受注でき現在のビクタースタジオの原型となる大改造を行いました。その勢いで国内の多くのメジャースタジオの設計を受注することが出来ました。中でもビクターのエンジニアだった内沼氏がスピンアウトして立ち上げたミキサーズラボとタッグを組んで、日音、サウンドバレー、デルタ、ウェストサイド、オンエア、ジャニーズ、ベイブリッジ、スマイルガレージ、パラダイスキングダムなどのスタジオを設計し、更に大手のスタジオ、プロダクション系などからも依頼があり、スタジオの需要が増え続けた時代背景もあって、数多くのスタジオを手掛けることが出来ました。

その頃は既に CD が普及しスタジオもデジタル化されだしていました。日本ビクターも研究所を中心に DAS-900 という U マチック VTR の走行系を使用した 2 チャンネルデジタル録音システムを開発して AES などを通して海外に攻勢をかけていました。我々も AES にブースを持ち国内実績のスタジオ写真を展示して海外進出を計っていました。図 1 の写真はその頃ロスアンゼルスで開かれた AES の我々のブースに色々な人達、(左からビクタースタジオ山口部長(当時)、ADG (Acoustics Design Group) のジョン・フリン、豊島、ジェネレックスピーカーを開発した故イルポ・マルチカイネン社長、有名なイギリスの音響設計家ニールグラント) が集まり歓談しているところです。

1984 年のパリ AES でこのようなブースで成果展示をしているところに、ロンドンのタウンハ

ウス・スタジオのエンジニア、ジェフ・アターが打ち合わせをしたいのでロンドンまで足を運んでくれないかと言ってきました。そこで、AES 終了後にロンドンのタウンハウス・スタジオを訪ねました。タウンハウス・スタジオは現在バージンアトランティック航空のオーナーのリチャード・ブランソンが 1973 年に立ち上げたバージンレコードの所有するスタジオでロンドンの西、シェパーズブッシュの近く、地下鉄の駅ではゴールドフォークロードにありました、建物は図 2 の写真のように、所謂だまし絵の窓が描かれています、本物かどうかは、すぐには分からない



図 1：AES LA の JVC ブース

ユニークなものでした。チーフ・エンジニアのアラン・ダグラスに面会した時に、今度新設する第 4 スタジオの設計を依頼されました。今までのスタジオはトムヒドレーの設計だったが何か新しいことをやりたい、とのことでした。話を聞くうちに我々の情報をアランに伝えたのは SSL のエンジニアのクリス・ジェンキンス（現在 SSL 役員）だということが分かってきました。SSL のクリス・ジェンキンスはスタジオに SSL のコンソールのセッティングする時に来日して設置したコンソールの調整を行うエンジニアで、東京の多くのスタジオで出会いました。又よく一緒に飲み歩いて、「お前の設計ポリシーは何か」と訊かれて、私は、これからのスタジオのコントロールルームはシンセや器材が増えて来るうえに、クライアントやミュージシャンもコントロールルームで音を聴くようになるので広くする必要があることを力説しました。なんとこのクリスが、以前、タウンハウス・スタジオのエンジニアを務めたことが有り、アランとは大変仲が良いことが分かったのです。彼は日本に来るたびに、ロンドンのスタジオとは一味違う、コントロールルーム がゆったりしたスタジオを見てロンドンにもこんなスタジオが欲しいと思って、このチャンスにアランに紹介してくれたのです。一方アランは、「初めての日本人が設計するスタジオは、どんな音がするのか分からないので、心配でもある」というので、それでは日本に来て、「私の設計したスタジオを実際に使ってみたらどうだ」と提案しました。「それは良い案だ」と言うことで、この年の秋にアランとスタジオ・マネージャーのバーバラ、経理のヴィッコリーの 3 人で来日し日音スタジオを拠点に私の設計したスタジオをいくつか回ってスタジオ見学をしてもらいました。

実際に日音 C スタジオで持参の 24ch マルチ・テープによるトラックダウン作業を行ったとこ

る、彼は、その音とスタジオデザインが大変気に入ってしまいました。その結果、「新設の第4スタジオのコントロールルームは、色、材料、モニター、スピーカーも含めて全くCスタジオと同じにして欲しい」と要求して来ました。スタジオのメイン・ブースには図3、4の写真に見るような、当時開発したシリンダー状の吸音反射が回転する残響可変装置を壁、天井に取り付けました。残響時間0.4Secを中心としたこの残響可変システムは大変評判になってポップス界ではロンドン・ナンバーワンのタウンハウス・スタスタジオの評価を更に高めることが出来ました。



図2：タウンハウス・スタジオ概観



図3：タウンハウス・スタジオ 第1スタジオ



図4：オリンピック・スタジオ 第1スタジオ

後に JAPRS スタジオツアーでタウンハウス・スタジオを見学した時の内沼会長（当時）は「エッ、日音スタジオじゃん」と言って絶句してしまいました。またバージンレコード所有のロンドン No1 スタジオを設計したことにより海外での評価を上げることが出来ました。これに続き同じくタウンハウスの第3スタジオ、第1スタジオ、同じくバージンレコード所有のオリンピック・スタジオの第1、第2スタジオ。メトロポリス・スタジオのA、B、C、Dスタジオ。トレバー・ホーンのサームウェスト・スタジオ1、2、3などロンドンのメジャースタジオから数多くのスタジオ設計の注文が来るようになりました。

1985年タウンハウスが完成した年、フィル・コリンズのエンジニアであるヒュー・バジャムから連絡を受け、サリー郡ギルフォードに近いフィッシャーレーンにあるジェネシスのスタジオの改修を行うことになりました。タウンハウスでレコーディングしていたフィルが第4スタジオの建設過程と仕上がりを見て「是非、あの設計家に頼みたい」とヒューに連絡させたのでした。このスタジオは英国の有名なスタジオデザイナーであるアンディー・モンローが設計したもので、「コントロールルームがライブすぎて作業しにくい。タウンハウスのような音響状態にして欲し

い」というものでした。フィル以外のメンバー、マイク・ラザフォード、トニー・バンクスの見も取り入れて設計しました。この改修なった新しいスタジオからは多くのヒットが続出しました。この時、建築を担当した建築士ジョン・フリンとヒュー・パジャムと私と日本ビクターで、一緒に仕事をしていた Bike Suzuki こと鈴木 弘明（現 MQA 日本代表）の 4 人で音響設計グループ ADG を設立し、ロンドンと東京を中心にしてヨーロッパをはじめアメリカ、アジアへと展開して行きました。

アビーロードスタジオ受注

1986 年ロンドンのパートナーである建築士のジョン・フリンから、またしても真夜中にかなり興奮して「サム、やったぜ。アビーロードが決まったよ」と言う電話が入りました。

アビーロードが第 3 スタジオを改修するという話は 3 年ほど前から巷に広まっていた数社がアプローチをかけていました。日本ビクターとしても温めていたデザインを担当のチーフ・エンジニアのマイク・ジャレットとスタジオ・マネージャーのケン・タウンゼントに提案していました。ある時、ケンから、「ビクターのスタジオ案を EMI の重役連中に説明してくれ」と言われて、スタジオのことは、全く理解出来ないだろうと思われるダークスーツの 5 人ほどの役員に我々の提案をプレゼンしました。このプレゼンが終わった時、重役の一人が、私の胸のビクターマークのバッチをみて、「君はどうして EMI のバッチを付けているのか」と質問してきました。ニッパーマークは実は EMI のマークでもあるのです。日本ビクターのニッパーマークはアメリカ RCA からのもので、日本ビクターは日本国内でのみ使用可能なので、JVC のマークがニッパーマークであることを英国人は知りません。その経緯を説明すると「フーン。すると我々は兄弟か」と笑って、急に硬い雰囲気緩和が和やかになりました。まさかのニッパーマーク効果でした。このプレゼンの結果が先ほどの電話でした。プレゼンテーションは入札方式の一部で、競合他社は 4 社だったと聞きました。

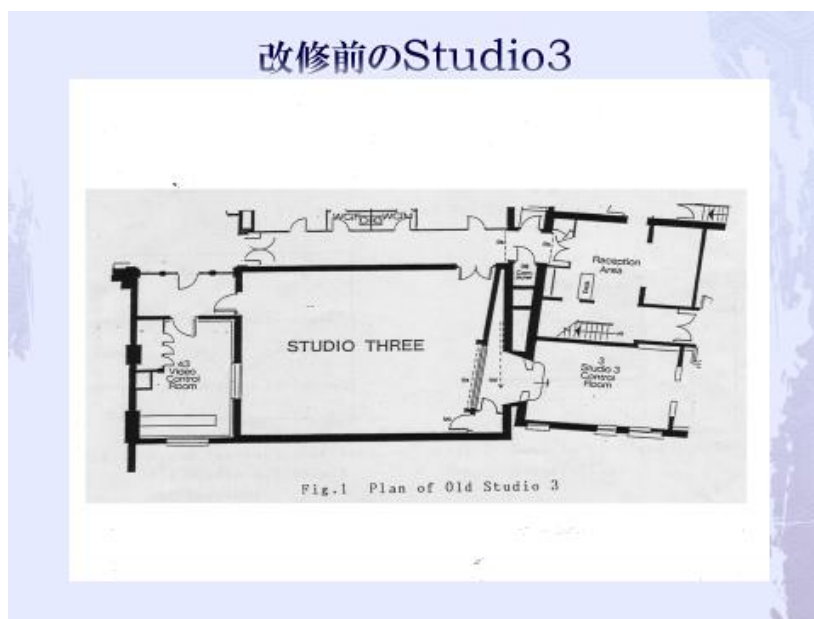
アビーロードスタジオ エピソード 1 音漏れ事件

ここでは、この第 3 スタジオ建設にあたってのエピソードをお話したいと思います。アビーロードに係わるエピソードは幾つもありますが、これはスタジオ・マネージャーのケン・タウンゼントが“Abbey Road”というアビーロードの歴史、アーティスト、エピソードなどが書かれた単行本の中でインタビューに答えて話した内容が、実際に活字になっているエピソードです。

改修予定の第 3 スタジオはロック専用のスタジオで映画音楽用スコアリング・ステージとして、またクラシック音楽の収録スタジオとして人気のある第 1 スタジオに隣接しています。ロックの爆音がクラシック録音中に漏れてくるのが彼らの悩みの種で、今回の改修もその音漏れをなくすのも目的の一つでした。図 5 で見て頂ければわかりますが、旧スタジオのコントロールルームは小さくて使いづらいので、反対側、(第 1 スタジオ側)に設定しました生音は出ませんが今度はモニタースピーカーからの爆音が心配です。壁を解体して分かったのですがこの壁はレンガを積み上げて作られていました。何十年も経っているので目地のモルタルは剥がれ、隙間から第 1 スタジオの光が漏れてきました。この壁は遮音壁になっていなかったのです。この目地をしっかりと埋めて、第 3 スタジオ側の壁面に数十 mm のモルタルを塗り固定遮音層を強化しました。更に、浮き床の上にジブサムボードの多重層の遮音壁を設置し、十分の遮音量を確保しました。旧第 3 スタジオは 3m 強の天井高でしたが、新スタジオはその天井の上の 1 階層分をぶち抜いて、

天高 8m の、更に天窓を取り付けて陽の光が十分に入るデザインとしました。暗い雰囲気でも音もデッドだった旧スタジオと比べ、明るいデザインで響きが長くなり音も豊かになりました。しかもその響きを調整できるということで、この第3スタジオは大変な人気となりました。旧第3スタジオと改修後の第3スタジオの比較を図5の図面で示します。

柿落しはピンク・フロイドのアルバム”Delicate Sound of Thunder”で彼らから記念で初回のプレスのCDを頂きました。



改修後の Studio3

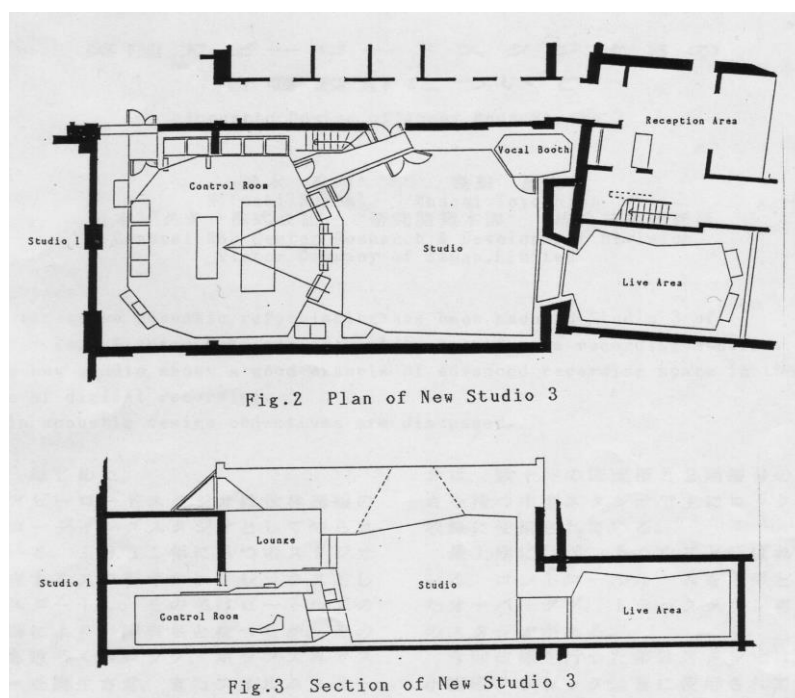


図5：改修前、後の第3スタジオ 平面図 断面図

完成しても、スタジオマネージャーのケン・タウンゼントは相変わらず音漏れを心配していました。私が日本に戻って間もなくケンから第1スタジオへの音漏れのチェックをするから立ち会って欲しいと連絡が入りました。急遽またロンドンに戻ると第1スタジオにエンジニア、ディレクター、工事業者たちが腕組みして集まって、深刻な顔をしていました。

モニターからロックの爆音を出して聞いてみるとのことです。実際に実験が始まると何と場所によってはわずかに聞こえてきました。音響測定では問題にはなかったのですがモニターのピークでは設定した暗騒音レベルを超えたのです。我々が良く経験することですが、実験用のピンクノイズと音楽との差が出たのです。音の漏れる場所をチェックしていると、ほとんどの場所で壁に耳を当てた時は聞こえますが音としては聞こえません。音として聞こえてくる場所にはベニアで作った中が空洞の大きさが 50cm x 70cm、厚さが 40cm くらいの箱が拡散版として取り付けてありました。この箱をいくつか外すと音漏れはなくなりました。ベニアの箱がスピーカーの振動版の役目をして壁の振動を空気中に放射していたのです。音響学的に言うと、マッチングをとってしまったのです。ケンをはじめ腕組みして深刻な顔をしていた連中が一斉にほっとした顔に変わりました。それでもケンが不安そうな顔をしているので “It will be Okay!” と「まあこんなもんだヨ」とか「問題ないよ」と言う意味で言ったら、やっと安心して「よし、これで OK だ」とアプローバルを出しました。この事を彼は前述の “Abbey Road” [2] というアビーロードスタジオの歴史、アーティストやエピソードが書かれている単行本のなかでインタビューに答えて話しているので、以下に訳します。

“1939年に現在のスタジオを建設して以来、初めての大型投資に EMI がゴーのサインを出した時、大きな問題をスタジオ設計、音響設計担当のサム・豊島が抱えることになった。「サム」ケンは恐る恐る尋ねた。「第1スタジオに絶対に音漏れしないと保証してくれるかい？」すると「大丈夫だよケン、全く問題ないよ」とサムが答えた。「もし、音漏れがあったら、君を裁判に引きずり出さなければならないよ。僕はそんなのは嫌だから」とケンは続けたが、「大丈夫問題ないよ。ケンが僕を訴えるなんてことは起きないよ。約束するよ」と言うのがサムの自信満々の返事だった。「そして、その通りだったんだ」「今日この日まで彼を尊敬してやまないよ」とケンは語った。”

図6にケンと一緒に撮った写真を、図7に新装なった第3スタジオの写真、図8にこの場面が書かれている書物 “Abbey Road” のページを示します。



図 6：ケン・タウンゼントと彼のオフィスにて

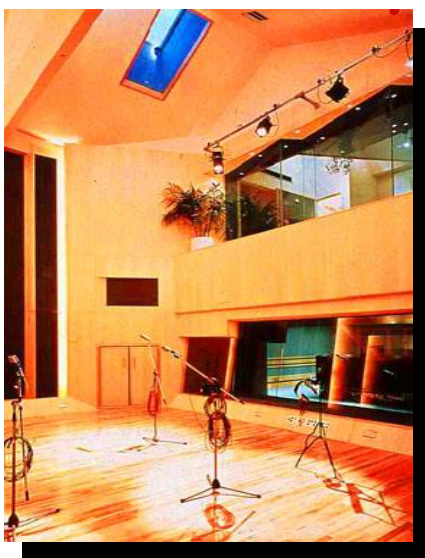


図 7：改修後の第 3 スタジオ

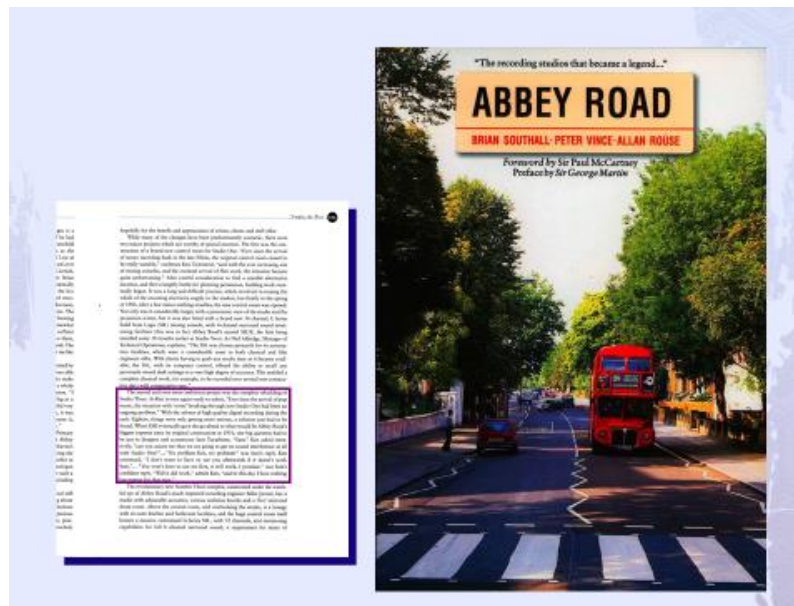


図 8：単行本 ABBEY ROAD と記事の場所

アビーロードスタジオ エピソード 2 幻のビートルズスタジオ

第 3 スタジオの成功に後押しされて次に第 2 スタジオ、所謂ビートルズスタジオの改修の話が持ち上がってきました。ビートルズが専用に使っていたことで有名であり、又 BBC の制作による世界のバンドを、この第 2 スタジオに呼んで演奏する番組が NHK BS からシリーズで放映されたので、このスタジオについては多くの人が知っています。

しかし実際 60 年近く大きな改修もなかったもので、吸音材と称して垂れ下がっている布の袋の中には海藻が入っていて異様な匂いを発しており、天井まである巨大な鉄製の壁取り付けの衝立板も重く動かすのが大変です。コントロールルームは 2 階にありスタジオに行くにはスタジオの中にある長い階段を降りなければならず、とても不便です。新しい第 3 スタジオを手に入れたエンジニアやプロデューサー達からは「第 2 スタジオも新しく使い勝手の良い近代的なスタジオに改修して欲しい」という要望があり、ケンから改修案作成の依頼がありました。ジョン・フリントと 2 階のコントロールルームを 1 階に移設する案を考えました。しかもコントロールルームの場所はスタジオの外側の庭で、階段側のレンガ壁をぶち抜いて中庭に張り出したコントロールルームの案を提案したのです。図 9 のパースを見れば分かりますが、コントロールルームの後壁をガラス窓にして庭の緑が迫るという音響的には処理が大変難しい案ですが、素晴らしいデザインでした。

英国にはアビーロードのように歴史的価値のある建物を改修する場合裁判所に行って反対する人の意見や質問に答えるというシステムが有り、この案がまとまった時点でジョン・フリントと二人で裁判所に出かけ意見を聞きましたが、反対意見はなく判事から「大きな木を切らないように」と言われたくらいで済みました。初めての経験だったので大変興味を持ちましたが、とても民主的なやり方で一般大衆の意見を如何に行政に反映させているか、その手法は勉強になりました。その後、改修図面も仕上がり機材も含めた概算のトータルバジェットが計算されました。と

ころが、EMI 本社にはそれをまかなうだけの予算が無かったのです。「折角の素晴らしい企画もここまでか」と諦めかけた時、エンジニアのマイク・ジャレットと色々と話していて、すごい案がでてきました。それは覗き窓を作るために壊した壁のレンガは皆、必ずビートルズの音楽を生で聞いている筈です。何万個と言うレンガにビートルズのエンジニアであり、又、現アビーロードスタジオのスタジオ・マネージャーであるケン・タウンゼントが、間違いなくアビーロード第2スタジオのレンガであることの証明としてサインして売り出せば、1個4、5千円で売れたとして、瞬く間に億と言う金が入ると言うものでした。しかしこの話はビートルズファンやアーティストの耳に入り反対運動が起き、ビートルズ・スタジオ（第2スタジオ）には「指一本触れてはならぬ」というお達しが出てしまいました。そして、このすばらしい計画も幻に終わってしまったのです。しかし2階のコントロールルームの音響を改良してコンソールやモニタースピーカーを入れ替えて、この第2スタジオは、素晴らしいスタジオとして今でも高い評価を得ています。

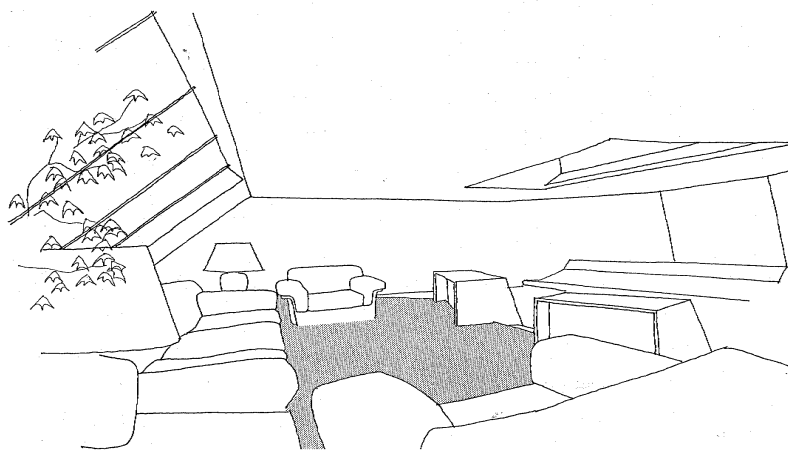


図9：第3スタジオの芯コントロールルームのパス

アビーロードに関しては、まだいくつもエピソードがありますが、紙面（時間）の制約もありますのでまたの機会にということにいたします。

アビーロードスタジオは観光名所になっていますが、一般のファンは門から中には入ることはできません。そこで熱烈なファンはフェンスの白壁に、いろいろ落書きをして帰ります。その多くはイギリス人とアメリカ人ですが、日本人のものもあります。このようにして真っ黒になった壁はペンキで真っ白に塗り変えられますが、又すぐに落書きが始まります。この壁には何万人もの思いが塗りこめられていると考えると、一寸怖くなります。

ビートルズのイギリスで12枚目の、また実質最後のアルバムとして人気のある“アビーロード”のジャケットは、言うまでもなく4人がスタジオの前の通り(Abbey Road)の横断歩道のゼブラを渡っている写真ですが、観光客が何人もこの横断歩道を歩いては、写真をとるので、よく交通渋滞が起きます。地下鉄のセントジョーズウッド駅から歩くと、10分余りで、この横断歩道を渡ってスタジオに入ります。

私も仕事で何十回も通りましたが、この前、2015年に訪問した時初めて1ファンとして図10の写真を撮ってもらいました。

ご清聴有り難うございました

(拙い文を最後までお読み頂き有り難うございます。)

Thank you for your attention.



図10：1ファンとして渡った Abbey Road の横断歩道

「参考文献」

- [1] 早坂 寿雄 “音の歴史” 電子情報学会編、コロナ社(1998) pp.83-84, p.218
- [2] Brian Southall, Peter Vince, Allan Rouse “Abbey Road” p.185 Omni Press(2001)

著者プロフィール：

豊島 政實（とよしま まさみ）



- 1964年 早稲田大学 大学院理工学研究科卒
- 同年 日本ビクター株式会社 音響技術研究所に入社
スタジオ機器（コンソール、スピーカ等）及び建築音響の研究開発及び設計を行う
- 1977年 研究所内に音響設計事務所を設立 所長に就任
研究所内の独立採算部門としてスタジオ、ホール等の音響設計業務を行う。

1980年 アジア、欧米中心の海外業務を展開

2000年 （株）日本ビクター 定年退職 （株）豊島総合研究所設立 所長

2001年～2009年 四日市大学 環境情報学部教授

2004年 日本音響家協会賞受賞

2011年 AES フェローシップ賞受賞（Audio Engineering Society Fellowship Award）

2014年 国立総合研究大学院大学より博士号（学術）授与

現在は四日市大学名誉教授、日本音楽スタジオ協会相談役、日本音響家協会 顧問、
（株）ミキサーズ・ラボ最高顧問

特集：2017年「音の日」

日本オーディオ協会賞選考授与を終えて

一般社団法人日本オーディオ協会

会長 校條 亮治

はじめに

日本オーディオ協会は、今年創立 65 周年を迎え、ホテル雅叙園東京において去る 12 月 6 日（水）音の日に併催で特別記念講演会と共に、創立 35 周年を記念して設けられた「日本オーディオ協会賞」の授与式を行いました。この賞は「技術進化の早い電子機器において、5 年毎にオーディオ技術の開発、及び実用化に大いに貢献した個人、または組織の顕彰を行うために設ける」と謳っています。なお、10 年毎に行う「功績・功労賞」とは分けて行うことになっています。さらに、創立 60 周年を機に選考基準に技術的評価に加え、業界全体への功績を俯瞰した経営そのものの在り方を評価し、「経営戦略」に対する「オーディオ協会賞」を設けました。また、特例として「オーディオ協会特別栄誉賞」も設けています。この賞の特徴はオーディオという技術と音楽という文化が融合した極めて特異な「感性価値文化」の発展を期しての狙いがあり、過去錚錚たる諸先輩や著名な方々、及び組織が受賞されている権威ある賞であることです。それだけに選考委員の決定は勿論のこと、選考そのものも慎重にならざるを得ません。また経営そのものとなると極めてセンシティブな事項でありなおさらのことです。

今回は、選考委員会（5 名）による慎重な選考の結果、以下の報告通り、経営部門で 3 件 3 社と技術部門で 2 件 5 社の受賞が決まり表彰されました。夫々受賞された皆様の功績、ご努力に深く敬意を表しますと共に、業界の発展に寄与頂き、組織を代表して心から御礼を申し上げます。

■ 選考委員会の発足

以上、申し上げた通りの選考委員会の発足ですが、約一年前より検討していたものの実際は総会終了後にオーディオ協会関係者、音の日委員会、学識者、理事会等より選出し理事会の命により以下の方が就任し、直ちに選考会議が発足しました。

<選考委員会委員>（敬称略・順不同）

豊島 政實 （四日市大学名誉教授・豊島総合研究所代表・博士：録音、音場、映像技術）
山崎 芳男 （早稲田大学名誉教授：デジタル・伝送技術）
森 芳久 （諮問委員・音の日委員長：音楽論、オーディオ技術）
君塚 雅憲 （国立科学博物館 協会理事・JAS ジャーナル編集長：デジタル、録音技術）
校條 亮治 （協会会長：経営革新、マーケティング）
事務局：照井 和彦（協会事務局長）

■ 選考について

今年の技術部門については開発及び実用化は何といても「ハイレゾ・オーディオ」に全員の意見集約がされました。スピーカー、ヘッドホン等を含むトランスデューサー系、ハイレゾスペックのソフト系がエントリーされましたが、回路系や標準化が薄かったと思われます。

一方、経営部門は経営革新によるブランド復活とそれを具現化するための商品開発によりお客様へ上手く繋いで事業強化を図った企業が受賞に至りました。

なお、「オーディオ協会特別栄誉賞」並びに「オーディオ協会賞大賞」は、今回は該当案件がありませんでした。

■ 受賞企業一覧と授賞理由

<経営戦略関係部門>

◎パナソニック株式会社 アプライアンス社 ホームエンターテインメント事業部

受賞理由：ブランド復活と市場活性化の推進

・昨今の厳しいオーディオ市場環境の中、往年のブランド‘テクニクス’を6年ぶりに復活させ高級オーディオへの再参入を2014年9月に発表しました。責任者である小川理子氏を先頭に市場の活性化とブランド認知活動に邁進し「Visionary（先進）」、「Refined（洗練）」、「Trusted（信頼）」をバリューとして、これに相応しい最新のデジタル技術を駆使した商品を開発し発表発売しています。

◎株式会社 JVC ケンウッド

受賞理由：CIとブランド戦略による市場活性化

・株式会社ケンウッドの創立70周年と日本ビクター株式会社の創立90周年を期しコーポレートブランド「JVCKENWOOD」グローバル企業を目指しました。中でも日本ビクターが掲げていた「革新の歴史の音と映像への探求心で時代を創る」を合言葉に、CIによるブランド戦略によって「Victor」を復活させて、ヘッドホンの商品化やハイレゾ・オーディオの開発商品化にも精力的に取り組んでいます。

◎三菱電機株式会社

受賞理由：ブランド戦略による組織を超えた事業強化

・2011年3月に新素材「カーボンナノチューブ」を活用した車載用スピーカー開発発表し、併せて「ダイヤトーン」ブランドの全面展開を打ち出されました。この開発により同ブランドをカーオーディオのトップブランドとして定着させ、またテレビカテゴリーでは「音質」を製品競争軸に持ち込み、高級オーディオ市場に「ダイヤトーン」ブランドを復活させ高級スピーカーとして発表しました。

<技術部門>

◎ソニービデオ&サウンドプロダクツ株式会社

受賞理由：ハイレゾ・オーディオの普及推進

・CDの開発以来、積極的にデジタルオーディオの高音質化に取り組む一方で、圧縮音源を含めたフォーマット開発や配信技術においても、多くの課題に取り組んできました。また、2013年9月にホームからモバイルまで「ハイレゾ・オーディオ」を一堂に商品展開して新しいオーディオの幕開けを演出し、この時に「ハイレゾ・オーディオ」にブランド価値を与える役割を果たした「ハイレゾ・オーディオロゴ」を、その後日本オーディオ協会に譲渡し普及拡大に大きく貢献しました。

◎株式会社インターネットイニシアティブ

◎株式会社コルグ

◎有限会社サイデラ・パラディソ

◎ソニー株式会社

受賞理由：「ハイレゾストリーミングサービス PrimeSeat」の開発及び運営

・ハイレゾ・オーディオの普及推進と連動すべく、ストリーミングによるハイレゾ楽曲の配信システムを立ち上げ、2015年にはベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の演奏会を現地から東京へ5.6MHz・DSDストリーミングでの配信を成功させました。その後もベルリン・フィルハーモニー管弦楽団演奏会や東京藝術大学のアーカイブなど様々なコンテンツをハイレゾで配信し、さらに現在では11.2MHzでの配信など積極的に展開されています。これは株式会社コルグの1Bit編集・再生ソフトウェアとソニー株式会社のDSD信号処理技術、及び株式会社インターネットイニシアティブの配信プラットフォームで構成されたものを、有限会社サイデラ・パラディソのプロデュースにより組織を超えて連携実現したものであり、ハイレゾ・オーディオ時代を象徴していると考えられます。



日本オーディオ協会賞受賞企業代表の皆様

特集：2017年「音の日」

第4回学生の制作する音楽録音コンテスト報告

日本オーディオ協会 音の日委員会 副委員長(CS ポート(株))

高松 重治

1 受賞作品発表

- 1.1 最優秀賞 中村 涼真（ナカムラ リョウマ）さん
洗足学園音楽大学 音楽音響デザイン録音コース 4年
- 1.2 優秀企画賞 石川 莉帆（イシカワ リオ）さん
尚美学園大学 芸術情報学部 情報表現学科 4年
- 1.3 優秀音楽作品賞 古澤 太嗣（フルサワ タイシ）さん
日本工学院専門学校 ミュージックカレッジ
レコーディングクリエイター科 2年
- 1.4 優秀録音技術賞 永田 悠（ナガタ ハルカ）さん
McGill University Sound Recording 2年
- 1.5 敢闘賞 古内 奏子（フルウチ カナコ）さん
専門学校名古屋ビジュアルアーツ 音響学科 2年



校條 会長から表彰状を授与される、中村さん（左上）、石川さん（右上）、古澤さん（左下）、古内さん（右下）【永田さんはカナダ在住の為欠席】

2 はじめに

一般社団法人日本オーディオ協会(以降協会と略)は主に再生機器(ハードウェア)メーカーの集まりですが、オーディオには音源(ソフトウェア)がなければ成り立ちません。

協会創立者のお一人、そして音響工学の権威であられた伊藤 毅先生のご遺志「芸術的にも高水準で技術的にも高品質の録音音楽を制作するための要員養成の重要性」に基づき、2014年から始まったオーディオ文化の継承である、協会「音の日」のメインイベントの一つである本題目のコンテストは、穴澤副委員長が強力に推進されてきました。穴澤氏は昨年6月に病床に伏し、小生が代理を務めましたがご安心ください、昨年暮れの協会の納会に元気な姿で参加されています。

3 コンテストの概要

募集要項にも書かれている通り、本コンテストはオーディオ文化を広め、楽しさと人間性に溢れた社会を創造すべく、健全な「音楽録音」と「再生録音」の発達を期待するものです。

審査をして頂いたのは6項に紹介する録音を指導する先生方で、小生のみがリスナーの代表として加わりました。

4 応募要項などの詳細

4.1 主催：一般社団法人日本オーディオ協会

4.2 共催：Audio Engineering Society 日本学生支部

4.3 協力：Audio Engineering Society 日本支部

4.4 応募資格：「音楽録音に興味を持つ学生の個人またはグループ」(高校生以上の学生)

4.5 応募期間等

受付開始日：2017年6月21日(水)

応募締切日：2017年10月27日(金)必着

4.6 応募作品作成期間：2017年1月1日以降

5 審査員構成(審査委員氏名と所属先、敬称略、順不同)

千葉 精一：所属 一般社団法人日本オーディオ協会諮問委員

亀川 徹：所属 東京芸術大学音楽学部

長江 和哉：所属 名古屋芸術大学音楽学部

我妻 拓：所属 日本工学院専門学校

深田 晃：所属 dream window inc.

中村 寛：所属 (株)WOWOW、Audio Engineering Society 日本支部

柿崎 景二：所属 尚美学園大学芸術情報学部

永井 秀文：所属 音響芸術専門学校

高松 重治：所属 一般社団法人日本オーディオ協会諮問委員 (CS ポート株式会社)

6 評価方法

今回は非常に多い 48 作品の応募があり大変な作業でありましたが、各先生に予め自宅などで、お聴き馴れているシステムで評点をつけていただき、最終的に例年通り亀川先生の東京藝術大学のミキサールームにて詰めを行いました。

7 採点について

配点は

- ① 企画制作力 20 点
- ② 作品の音楽性 30 点
- ③ 録音技術力 50 点

としています。「音・録音さえ良ければ」では最優秀賞は獲得できません。

どの様なものを作ろうかという企画力、そして自分の作品を如何に他に知らしめるか。それにはドキュメントが確りしていなければなりません。CD に入っているリーフレットを想像して頂けると将来へ繋がるのではなろうかと思えます。これらは「モノづくり」の基本であり、ソフトウェアやハードウェアを問わず、モノを生み出すときの共通の要求事項です。

- 作品の音楽性は内容説明に見合ったことが為されているか、素材の料理方法は、例えばどんな環境で行ったのか、どんな装置を使用したのか、各楽器への使用マイク、そしてマイキング、録音時のプロセッサー、試聴時に用いたアンプ、スピーカーなど多岐に渡ってのデーターや説明が求められます。それは文章や配置図など多岐に渡る説明方法があります。
- 自分がプロデューサーですからその気持ちを表すことが求められます。これらは既成の素材では有り得ないのです。
- 録音技術力、これは実際の試聴によって採点します。
- 先程の企画力・音楽性のドキュメントを参照しながら音を聴きます。
- 試聴の方法は各自の慣れた再生装置で聴き、更に同一システムで一堂に介して試聴しましたので、例年より精度の高い評価を得ています。

8 応募作品

8.1 応募は次に掲げた教育機関からありました。（順不同）

McGill University (CANADA)

専門学校名古屋ビジュアルアーツ

音響芸術専門学校

HAL 大阪

洗足学園音楽大学

名古屋芸術大学

尚美学園大学

日本工学院専門学校

東京藝術大学

HAL 東京

8.2 応募作品数・応募人数

今回は応募要項の見落としなどがあり、既成音源を個人別でマスタリングしたものの応募が多数ありました。見方によってはマスタリングのみの変化で面白かったのですが、後述する採点で大幅減になるハプニングがありました。しかし大変に多くの応募に感謝したところです。

応募作品数：48 作品

作品形態

2 チャンネル作品：43 点

5.1 チャンネル作品：5 点

応募人数：応募申込書による演奏者まで含め総勢 146 名

8.3 賞

採点について 7 項で述べましたが、「企画力」「作品の音楽性」「録音技術力」について其々の最高点を其々の賞としました。そして総得点の最高点を「最優秀賞」としました。今回だけの特別な「敢闘賞」は本来ならば失格に値する独自の作品ではないものを使用したものが、余りにも多かった為、企画力、作品の音楽性について大幅な減点としましたが、その中でも高得点であったものを敢闘賞としました。これは今回だけの限定的な賞です。

9 むすび

2017 年の音の日は森 芳久 実行委員長の下、今回も目黒雅叙園で開催されました。丁度 140 年前の 1877 年 12 月 6 日、エジソンの蓄音機から発した音から始まりこんにち迄オーディオは連綿と続いています。そして協会設立 65 周年の記念すべき年に当たりました。最近ではデジタル処理によって録音のプロセスは昔ほど難しくは無くなっています。なかんずく音楽の再現(再生)は芸術であり、演奏家の表現が聴取者に伝わっているか、その大事なプロセスを担う人が録音制作者であります。

デジタルの録音システムでもいまだに昔に製造された真空管増幅のマイクロフォンが珍重されています。また米国ではアナログ録音がリバイバルし、更にアナログ LP レコードやアナログテープまで販売されている現状であります。日本でも中古 LP レコードの取引が増加し、アナログ関係のオーディオ製品が再び多くなってきました。レコード会社では LP カッティングマシンの再導入など、アナログレコードの見直しが盛んになって来ました。今年の「音の日」にはアナログ部門が出来るかもしれません。

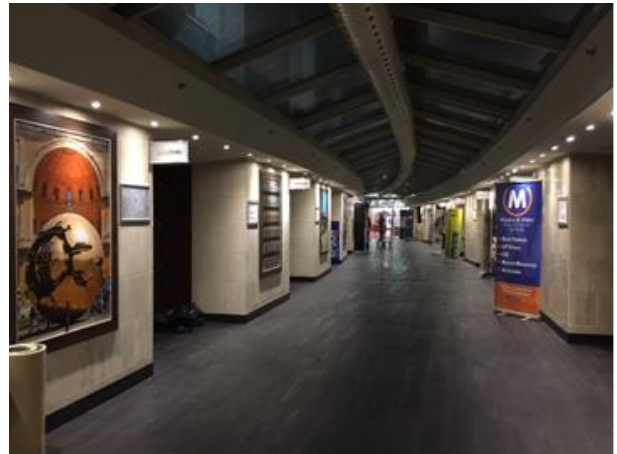
音の日のこの発表会には制作された学生が 43 名も参加され、短時間ではありましたが一般のオーディオ愛好者らと共に実際に試聴されて、今後の学業にプラスされる事と思います。

最後になりましたが、今回のコンテストの運営にあたり、多くの人的ご協力がありましたことに改めて感謝を申し上げますと共に「よい音」「よい録音」が継承されてゆくことを念じてやみません。

Roma hi-fidelity 2017 見学レポート

パナソニック㈱ アプライアンス社
井谷 哲也

ローマ市の南西郊外、四つ星ホテル Mercure Roma West で 2017 年 11 月 19 日(土)～20 日(日)の 2 日間で開催された Hi-Fi ショーに参加したので簡単に報告する。



イタリアでは、同じ主催者がこの時期のローマと 4 月と 10 月にミラノで大きな Hi-Fi ショーを開催しており、ローマは今回で 15 回目との事。因みに、次回のミラノは 2018 年 4 月 14 日(土)～15 日(日)、ローマは 2018 年 11 月 24 日(土)～25 日(日)の予定である。

ホテルの地下 1 階のボールルームと、地上 2 階のホテル客室を使って、36 ブースに 78 社が展示。開場時間は 10:00～19:00 で、入場料は無料。空港と地下鉄の最寄りのエウル・フェルミ駅からはホテルの間は、ホテルのシャトルバスが運行している。

Technics は復活 3 年目で今年初めての参加であるが、大手のメーカーが構えるブースは Technics のみ。他に大きな部屋を使うのは地元ディストリビューターのブースで複数メーカーが一つの部屋に展示されているケースが多く、ショー全体で Technics が目立っていた。また日本人の参加も Technics の 3 名のみで際立っていた。

土日共に開場早々から多くの来場者があったがお昼時にパタッと客足が止まったり、また土曜日の夜はサッカーの放送があるとかで早く引けたりするのはイタリア的かも。お客様の年齢層は広く 30 歳台から 60 歳台までで、他の欧州ショー並み。ミュンヘンの High End ほどではないが、カップル・家族連れもちらほら。

公式ホームページ：

http://www.milano-roma-hi-fidelity-audio-show.it/Roma_2017_index.html

場所的には、ローマ国際空港（フィウミチーノ）とローマ市外の中間の田園風景が広がる立地で、空港からタクシーで 20 分程度と交通の便は良い。ホテル周辺は何も無く、来場客は観光やショッピングスポットのついでではなく、純粋にショーを楽しみに来ている様だ。ショーそのものは小規模だが、じっくり時間をかけて見学する人が多く、何度もブースに来る人も多かったように感じた。

我々は会場となった Mercure ホテルではなく、近隣の Sheraton Parco de' Medici というホテルに宿泊。郊外型ゴルフリゾートホテルで、3 ルームのスイートだったが丁度シーズン・オフで格安で宿泊が出来た。ショー会場まで車で 5 分、ローマ市内へも車 30 分程度と便利な場所で、清潔な客室に、ホテル内のレストランやバーも充実しており、今後参加させる方にはお勧めである。

また、会場周辺は少し車で走ると地元客向けのイアリアンレストランが多数あり、観光地や市街地と異なった趣のイタリア料理が堪能できる。英語が話せないウエートレスも多くオーダーに苦労するが、それも旅の楽しみと思えば、サービスも行き届いており値段も安くお勧めである。

■各社ブース



会場ホテル地下には大きめのボールルームがいくつか並び、どうやら大手のディストリビューター達がブースを構えている模様。日系を扱うディストリビューターも全てここに集まり、Epson、JVC、Onkyo、Yamaha、Sony、Accuphase、Luxman などが展示・デモされていた。



日本でも有名な Opera、Unison Reserch などのイタリアメーカーや、Dali（ここだけがー社単独ブース）の他に Focal、B&W、Hegel、Kef など欧州メーカーを扱うディストリビューターもここに陣取っている。



1階と2階は、客室（ハイエンド大阪で使うハートンホテルほどの小さな部屋）で小規模なメーカーが使っていた。イタリアには、ほとんど日本では馴染みのない小規模メーカーが多数存在する模様で、どこもオーナー自ら出向いてデモしていて、来場者との間で熱い会話がなされていた様だ（言葉が判らないのであくまで推測）。



■即売コーナー

どこのショーでもある様に、レコード店、中古店が複数参加し即売コーナーが設置されており、所謂エサ箱をつつく光景が見られた。特に目立ったのが中古レコード店。日本からの中古品は人気が高く、わざわざ別箱で Japan Press と表示。日本から仕入れたロック、Jazz 盤も多く並べられていた。日本で入手困難な山本剛の Misty が€89。80 年代にプレスされた LONDON の再プレス Super Analog 盤も多数売られていたが、国内で¥3000 程度の盤が€55 と少々高めの値づけ。どこの国でも中古レコードは高騰している。



また新品レコード店では日本から輸入されている SACD が目立っていた。欧州でも見直されてきている SACD だが、ソースはほとんど日本から供給されている。



その他、オープンリールテープを扱う店もあり、レコードに続いてテープが盛り上がっているのも全世界的な傾向である。

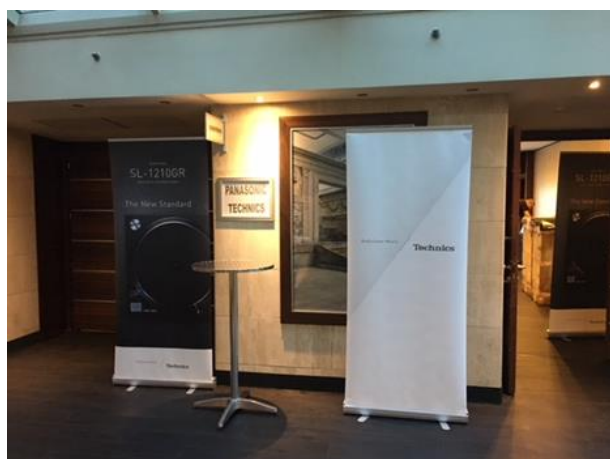


また、即売コーナーには、古い真空管やターンテーブル、アームなどの中古品（ジャンク品？）、ほとんど自作に近い様なインシュレータやシェルといったアクセサリーを陳列している店もあり、こちらも終始にぎわっていた。自作オーディオを専門とする雑誌も発行されており、日本と同様に幅の広いファンが居る事を物語っている。



■最後に Technics ブース

Technics は今年初めての参加であるが、地下一階の入り口に一番近く、最大床面積の会議室を使わせて頂く事ができ、たくさんの来客を迎えることが出来た。国際フォーラムの hall-D くらいの床面積(20mx20m 程度)の部屋で、天井は普通の会議室並。床が硬くライブな部屋で現地販社が独自に手配した地場メーカーの吸音板を使って音調。現地販社も初めてのショー参加なのでラックが準備できておらず、最初貧弱な会議用の机しかなく音質的に納得できなかったのが現地メンバーにクレームした所、ホテルが協力的でわざわざレストランから頑丈なテーブルを運んでくれて納得できるレベルまで音質を仕上げる事ができた。



R1 システム、SU-G30 / SL-1200GR / SB-C700、SU-G700 / SL-1200G / SB-G90、の 3 システムと SC-C70 がデモ可能状態に設置され、ST-G30 から DLNA で再生。それぞれ現地メンバー順番にシステムを紹介しながら音デモを繰り返していた。



音デモのコンテンツとしてはピンクフロイドなどロック・ポップス系が主で、特徴的なのはかなりの爆音である事。音デモ中は会話が困難なほどだが、音質は概ね好評だった。



土曜に1回と日曜4回のセミナー開催。私が英語でTechnicsの歴史・ポリシー・商品説明を英語で行い、現地スタッフがイタリア語訳。わざわざ日本からエンジニアが来ている事もあり、毎回満員のお客様だった。また、国内のイベントなどでもある様に、現地のライター Mr. Gianluca Di Felice とコンサル契約し、本イベントで商品・技術説明の手伝いを頂いた。どこの国でもコアなお客様には、専門性の高いライターの説得力は有効である。



R1 シリーズは、ほとんどの人は初めて聴いたはずで“今ショーで最高の音だ！”と言われたお客様も複数おられたとか。Technics ブースでは最も注目されていた。他の商品ではSL-1200(G/Gr)とC70が注目されており、特にC70はチューニングがうまくいって、小さな筐体から出るリッチな低音がお客様を驚かせていた。

来場者で英語を話せる人は限られており、私を含め日本人スタッフが直接話しかけられる事は少なかったが、中には熱心にSP-10の事を質問してくる方(私が対応しただけでSP-10所有者3名)や昔からのTechnicsファンも多く、ショーへの参加自体を喜ばれ、握手や記念撮影などを要望させる事もあり、依然ブランドとして根付いている事が印象的だった。

後日、当社の現地販社メンバーからの報告によると、ショー主催者からも、Technics 日本人チームのおかげで展示会が更に盛り上がったということでお礼の言葉を頂戴したとの事。



著者プロフィール



1980 年松下電器産業（現パナソニック）株式会社入社。
CD プレーヤ、レーザーディスクプレーヤ、DVD プレーヤ、
BD レコーダ等の商品開発を経て現職。

現職：パナソニック(株)、アプライアンス社、
テクニクス事業推進室、CTO/チーフエンジニア。

新春特別コラム
「真空管アンプに人生を賭ける男」
A & M 株式会社 三浦 篤 氏
編集委員 森 芳久

毎年世界各地で催されているオーディオ関連のショー、CD が登場し最も活気を帯びていた 1980 年代から比べれば少なくなったとはいえ、まだまだ世界各国の多くで毎月のように開催されている。その主なショーのほとんどに毎回顔を出し、日本人の出展者としては最も有名な人物がいる。

その人こそ今回ご紹介するエイ・アンド・エム (A & M) 株式会社の創業者三浦 篤(みうら あつし)氏である。真空管アンプ一筋に 60 年余、文字通り人生を賭けて取り組み、世界中にそのファンは多い。事実、ショー会場の A & M のブースではいつも商品に見入る観客と三浦氏を取り囲む人の数が拮抗している。それらのオーディオファンと楽しそうに談笑している氏の姿は、誰をも拒まずしかし威厳に満ちた良きオーディオ指導者の風格が漂っている。

さて、その三浦氏が何故オーディオの道に足を踏み入れたのか。

昔、三浦氏にそのお話を伺ったとき、その切っ掛けが偶然であったとの答えに少しびっくりしたのを憶えている。昨秋、三浦氏と東京インターナショナルオーディオショー会場でお話をする機会を得たので、「新春特別コラム」として氏のオーディオ人生について簡単にご紹介したい。



2017 年東京インターナショナルオーディオショーでの A & M ブースにて

三浦 篤氏は1934年3月13日長野県岡谷市で生を受け、高校まで長野で過ごし関西学院大学に進学する。戦前、中日ドラゴンズの捕手として活躍した三浦 敏一(みうら としかず)選手を叔父に持つ篤少年としては、当然のように幼いときから野球に夢中であった。しかし、大学では卓球部に入部、そこで先輩で卓球部のマネージャーだった錦水電気工業株式会社創立者の子息早川 齊(はやかわ ひとし)氏と親交を深めることになる。これが縁となり1956年関西学院大学卒業と同時に早川氏に請われて錦水電気工業株式会社に入社することになった。

早川 齊氏はいち早くオーディオの世界に音楽性とデザイン性を取り入れたことでも知られ、1961年に名器と言われた6BQ5 プッシュプルのプリメインアンプSQ-5A、SQ-5Bを発売、1963年には6RA8 プッシュプルのプリメインアンプを発売し、LUX(錦水電気オーディオブランド)の名を不動のものとし、その後ラックスの社長となったオーディオ界の逸材である。

これらの美しいデザインのケースとシャーシーなどの部品集めに奔走したのが三浦氏であった。当時、浅野 勇(あさの いさむ)、岡原 勝(おかはら まさる)などのオーディオ評論家が「アンプの音は回路図を眺めれば判る」と明言され、オーディオ誌の製品紹介にはアンプの回路図とその解説が載せられていた時代である。そこにいち早く部品や製品のデザイン性を重視したLUXの商品戦略、同時に音楽に密接した音作りはオーディオファンのみならず多くの音楽ファンを魅了した。見事な戦略であった。

こうしてLUXのアンプは群を抜く存在となり、三浦氏は営業で忙しく日本全国を飛び回る毎日であった。当然ながら氏は真空管アンプ、またオーディオの楽しさに目覚めた。当時のオーディオ専門店のうるさい社長や店長、ユーザーなどとの直接の交流から、ユーザーがオーディオに何を求めているのか肌身で感じることができた。

やがて三浦氏は1963年より米国マーケット開拓を任されることになる。ここで、マランツの創業者ソウル・マランツ氏、マッキントッシュのゴードン・ガウ氏、H.H.スコットの創業者で真空管アンプ設計の天才といわれたハーモン・ホスマー・スコット氏などオーディオ界のレジェンド達と親交を結ぶことになる。氏は彼らとの付き合いを通じて益々真空管(球)の持つ可能性とその魅力の虜になっていく。そして、彼らの製品をつぶさに見て、ユーザーを裏切らないモノを作り続けることの大切さ、同時に会社また組織のリーダーには人としての魅力が最も必要だということも学んだ。

1982年CDが発売され、オーディオ界に大きな技術のパラダイム・シフトが起こった。やがて、多くの会社がアナログからデジタルに大きく舵を切り、既に真空管(球)からトランジスタ(石)へと転化していたアンプの世界もその動きを一段と加速していった。

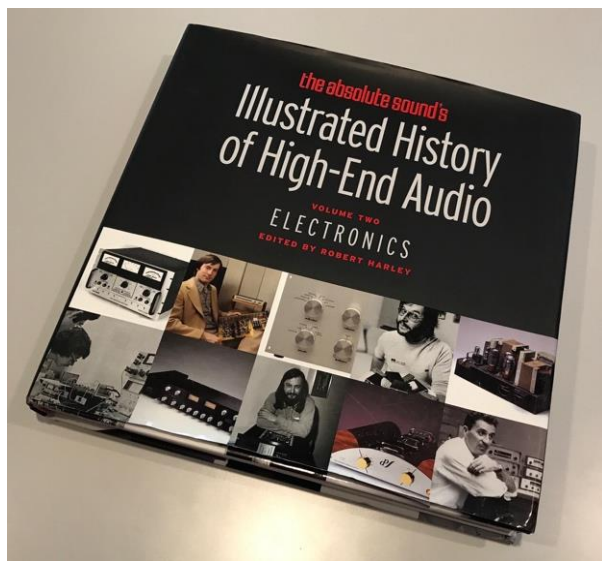
1986年、三浦氏は自身の夢であった真空管を用いた「拘りのオーディオ機器」の開発を目指し、新たにエイ・アンド・エム(A & M)株式会社を設立する。その決意を固めたのは「筋の通ったものを作りたい」との思いと「アンプを作るには真空管に勝るものはない」という信念であった。

ソウル・マランツ氏からは、もしオーディオ業界で起業するならば「大いなる情熱と限りない資金が必要」とのアドバイスを受けていたが、三浦氏は「自分に資金はほとんど無いが、情熱だけは誰にも負けない」と応じた。その決意を聞いたマランツ氏は「今から真空管アンプで起業するならそれを貫け」とエールを送ってくれた。

A & M という会社名は、海外での展開を考えたとき A というアルファベットのトップから始まる名前ならば、ショーなどのカタログ上でトップに記載されること、目立つことなどの理由の他に自分の名前の「篤」(A)と奥さまの「まり」(M)からとのこと。さらにブランド名の AIR TIGHT も真空管アンプをイメージできる秀逸な名称といえよう。ここにも三浦氏の人柄が表れている。

海外にも多くの知古を持つ三浦氏は自分の作る真空管アンプを全世界に向けて販売している。そこには氏の「どんな難しいスピーカーも鳴らしてみせる」との自信とチャレンジ精神があった。氏自ら AIR TIGHT のアンプを持って海外の販売店に出かけ有名高級スピーカーを次々に鳴らして見せたのである。「情熱だけは誰にも負けない」まさにその実践であった。地道な販売活動であったが AIR TIGHT と Mr. Miura の名前はハイエンド・オーディオの世界で着実に根付いていった。欧米での AIR TIGHT の評価が我が国のそれより高いのは、自分たちの耳を信じ「論より証拠」を尊ぶ海外ならではのであろう。

一昨年、三浦氏の下に素晴らしい朗報が入った。それは米国の権威あるオーディオ雑誌 The Absolute Sound 誌の「HALL OF FAME AWARD」受賞である。この名誉ある賞の受賞者は日本人としては二人目の快挙と聞く。そして、同誌発行のバイブルとも言える「Illustrated History of High-End Audio」にも AIR TIGHT が取り上げられ Japanese Contribution のカバーページ写真を飾っている。

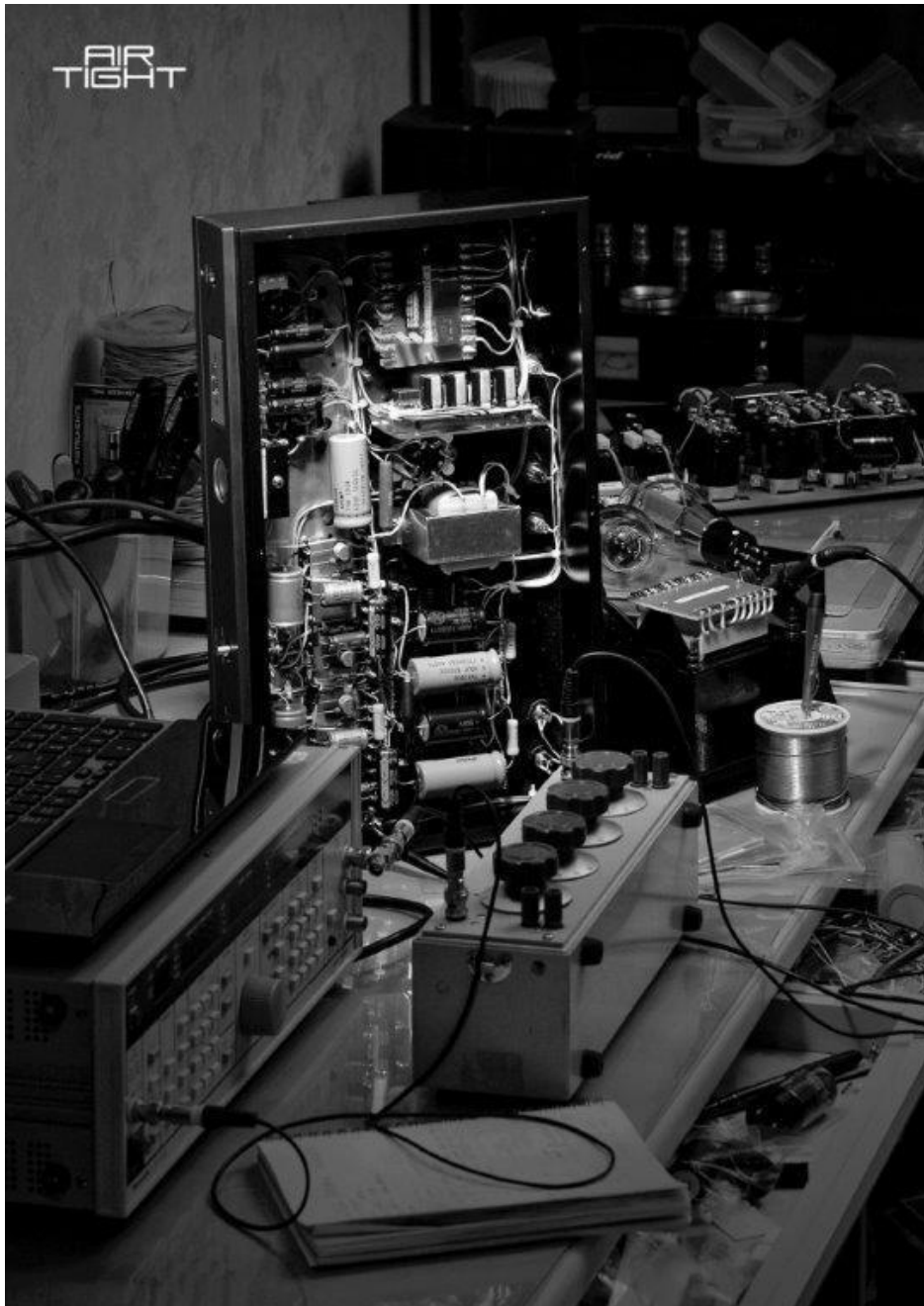


AIR TIGHT の真空管アンプは米国 Absolute Sound 誌発行の Illustrated History of High-End Audio II (電子機器編)に取り上げられた

これからは真空管のキット、それも信頼性のある本物を作りオーディオを目指す若い人々に「本物とは何か」を伝えていきたい。三浦氏の次の夢である。

幼いころ野球の球を追いかけた少年は今、真空管という球を追ってさらなる高みをめざしている。回路図では表せないアンプの魅力を今後どのように表現してくれるのか、「正直 60 年かけて

やってきてもまだその道が見えていない」こう謙虚に振り返りながらも三浦氏の眼は輝いていた。



A & M 社の実験室のような製造現場、ここで AIR TIGHT 製品が一台一台丁寧に組み立て調整されている

(文責 森 芳久)

【連載：Who's Who ～オーディオのレジェンド～ 第6回】
輝かしきキングレコード録音史 菊田 俊雄さん（その1）

聴き手：JAS 照井和彦



キングレコードは大日本雄弁会講談社（現在の講談社）にキングレコード部が新設されて 1931 年（昭和 6 年）1 月に新譜が発売されたところから歴史が始まります。この時は録音やレコード製造などを日本ポリドールへ委託していましたが、独テレフンケンと提携契約を結ぶことで不足していた技術力を得て発展への道を一歩踏み出していきます。

尾久に新設した工場にはプレス機などをドイツから導入し、音羽に建てた録音スタジオにはテレフンケンから来た技師ゼーランド氏が戦争前まで精力的に技術指導にあたってくれていました。そのゼーランド氏から直接指導を受けた秋山 福重氏は、菊田俊雄氏が入社した時の録音課長で 1949 年当時のメンバー 4 人はその秋山課長から録音技術の基礎を教えられていました。

Who's Who 四人目は、キングレコードで長年にわたり録音現場の第一線で活躍されてきました菊田 俊雄氏にご登場頂き、アナログ録音やその当時の様子についてお話を伺ってまいります。

アナログレコード

アナログレコードと一口に言ってもその歴史は古く、1877 年にトーマス・エジソンが円筒に錫箔を巻いて、振動板につけた針で音の振動を錫箔に記録したのが始まりで、フォノグラフと名付けられたところは皆さんもご存じですね。12 月 6 日のことであつたと言われており、それにちなんで日本オーディオ協会の音の日記念日になっています。次いで 10 年後の 1887 年にエミール・ベルリナーが蠟円盤に音みぞを刻む方法を発明し、その後の発展の礎を築いてくれました。レコードは 1960 年頃まで、毎分 78 回転の SP 盤が世界中で親しまれていましたが、1948 年に微細溝（Micro groove）で毎分 33 $\frac{1}{3}$ 回転の LP 盤が発明されて徐々に入替っていきます。更に 1958 年には LR の 2ch ステレオを一本の音溝に記録するステレオ盤が開発されて、現在のアナログレコードの姿になっています。

JAS：キングレコードが創設された頃のことを教えてください。

「レコード盤が発明されて 20 数年後の 1910 年には日本コロムビア、昭和に入って日本ビクターといったレコード会社が創設されていくのですが、日本でラジオ放送が開始されて間もない頃で、音声を扱う音響機器としてのマイクや直熱三極管による音声増幅器が実用化された時代にキングレコードが生まれました。レコードの録音もラッパに向かって大声で叫んで録音する、今でいうダイレクトカッティングの方法から、電気吹込みに代わっていった時代でした。庶民の楽しみの一つになった映画も無声映画の時代に終わりを告げトーキー映画へと変化しつつありました。テープ録音が始まるのはまだずっと先のことになります。」

JAS：もう少しレコード会社の事情を知りたいです。



「記録によると先行していたコロムビアやビクターはすでにアメリカ系の技術を導入しており、そのためにキングは欧州・ドイツの技術を導入したという訳です。また、この頃の録音技術は各社重要な企業秘密事項でした。写真にあるキングレコードのスタジオ完成は 1936 年（昭和 11 年）でテレフンケンから来た技師のゼーランド氏の技術指導で機材設営も進められていました。写真にあるように音羽にある講談社の裏山を上った林の中に在って、日中は鳥がさえずり、盛夏ともなると蝉が鳴き渡るとても自然豊かな環境で、録音スタジオ棟は鉄筋の建物でしたが、木造の粗末な事務棟が板張りの廊下でつながっている状況でした。」

JAS：1949年と言いますとSPレコードの時代だと思うのですが。

「私がキングレコードに入社した1949年（昭和24年）はLPレコードが発明された翌年ですが、日本では戦後の混乱もあって全く話題にもならず、各社はもっぱらシェラックとカーボン粉を熱で固めた原料で製造された78回転SP盤での発売でした。シェラックはカイガラムシの分泌物から作る天然樹脂で南方からの輸入品で当時は貴重な材料だったため、盤の表面だけに使って内側は紙を境に別材料のあんこを入れるのがレコード製造では当たり前でした。上下にクラフト紙が2枚入っているため少し強度が増す利点はあったようです。いずれにしてもSP盤は曲げたり落したりすると簡単に割れてしまう脆いものでした。そうしたSP盤の製造時代にスタジオでの録音にかかわることが出来て、原盤制作のワックス盤（ろう盤）へのカッティングなどに携われたことは、思えば非常に貴重な体験をさせてもらったと思っています。日本でこの経験者はもう私だけかも知れません。」



JAS：その頃のスタジオ録音はどんな様子だったのですか？

「写真は昭和15年ごろのものです。邦楽は三段くらい用意された演奏台を使い、奏者はひな壇に並んで2〜3本のマイクで録音していました。写真のマイクは中に大きな3極管が入っているテレフンケンのコンデンサーマイク（M-14）でここでは2本配置して収録しています。このマイクは乾燥した欧州ではいいのですが湿度の高い日本ではすぐにノイズが出始めるので、



戦前にもかかわらずスタジオには空調が完備されていました。ただし冷気はスタジオ内に送り込まれるだけで、事務所にこの設備はありません。エンジニアは暑い夏の録音では一日に何度もスタジオと事務所を行き来して体調を崩すことがありました。」

JAS：軍楽隊は録音もワンポイントですか？

「流行歌の伴奏音を一点吊りのワンポイントで録ることは少ないのですが、クラシック音楽や吹奏楽などではよく吊っていたようです。写真は当時有名だった内藤 清五と海軍軍楽隊で演奏者はマイク収音に合わせて並んでもらい、音のバランスが大きかったら演奏者に小さくお願いするか後方へ下がるように配置で調整します。そのほか歌やコーラスのある時はそれぞれ専用にマイクを置きますが、なるべく楽団から離れた場所に配置します。ソロの歌い手(歌手)などは手前のカーテンを引いてその陰で歌うことが多いようでした。いずれにしても最高4本までしかマイクは使えません。」



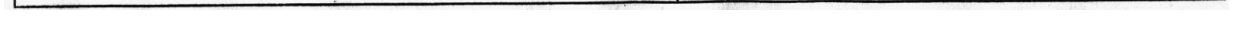
JAS：スーザホーンの前で歌も録っていますね。

「ははは。わざわざ広報用に撮った写真でしょうね。歌い手はこんな所には立ちませんが、その頃のスタジオの雰囲気は良く解ると思います。この写真では、右手前のマンドリンと尺八の音をきちんと録音するために2人の間にマイクが立てられています。楽器の位置に合わせて椅子の下には高さの調整台も見えますが、こんな工夫をして音楽バランスをとっていました。」



JAS：洋楽と邦楽で、何か違いはありましたか。

「録音の手法に違いはありませんが、邦楽演奏者は足袋(たび)を履いているのでスリッパや靴などは履きません。言いかえれば裸足での演奏です。それに対し、軍楽隊はきちんと靴を履いておりそのためにジュータンを用意するなど、空間設備の運用でしのいでいました。」



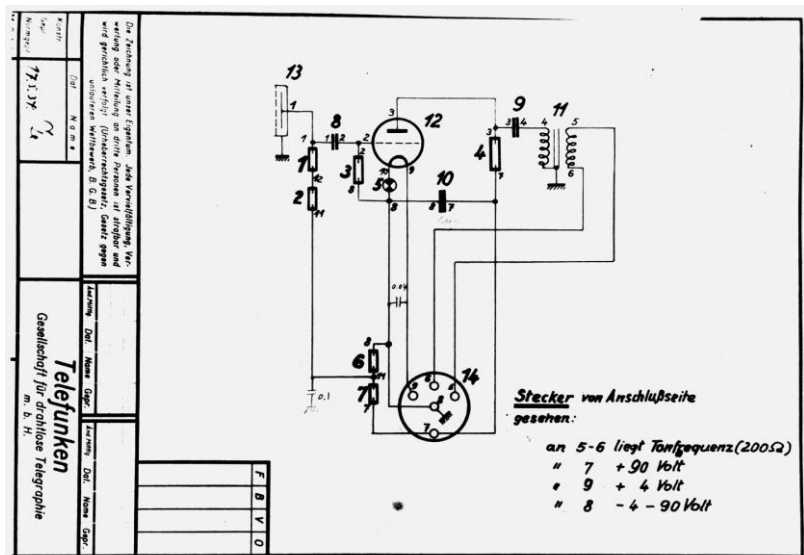
JAS：作業方法もシンプルに思いましたが。

「ミキシングは4つのボリュームに2つつつ手をかけて操作しました。レベル監視は光式のピークインジケータでした。写真では卓の上側の横 50cm 位の白い帯状部分がそれで、内側から 5~6 mm 幅の光の指針が動きます。感心したのは当時既にほぼ対数圧縮(dB)の指示計で VU 計のように非圧縮でなかったことです。また手前には指揮者との連絡用の電話機や隣のカットング室から送られるスタンバイ・スタートの赤と青の合図灯が見えます。なお、操作しているのは当時の上司の原課長です。テープ録音のように音を消すこともできず、取り直しも前の日からワックス盤を温めて準備してある分だけですから取り直しは殆どできない全員真剣勝負の現場でした。」



JAS：これはマイクロホンの内部回路のようですね。

「テレフンケンのマイク M14 の内部回路です。スタジオシステムプランにあったように、4 ボルト(pin 9 と 8) が内蔵真空管のヒーター電圧で、90 ボルト(pin 7 と 8) が真空管のプレート電圧用とマイクカプセルの振動膜の印加電源であることが判ります。90 ボルトを得るために 2 ボルトバッテリーを 24 個シリーズにつないだ箱を 2 セット、



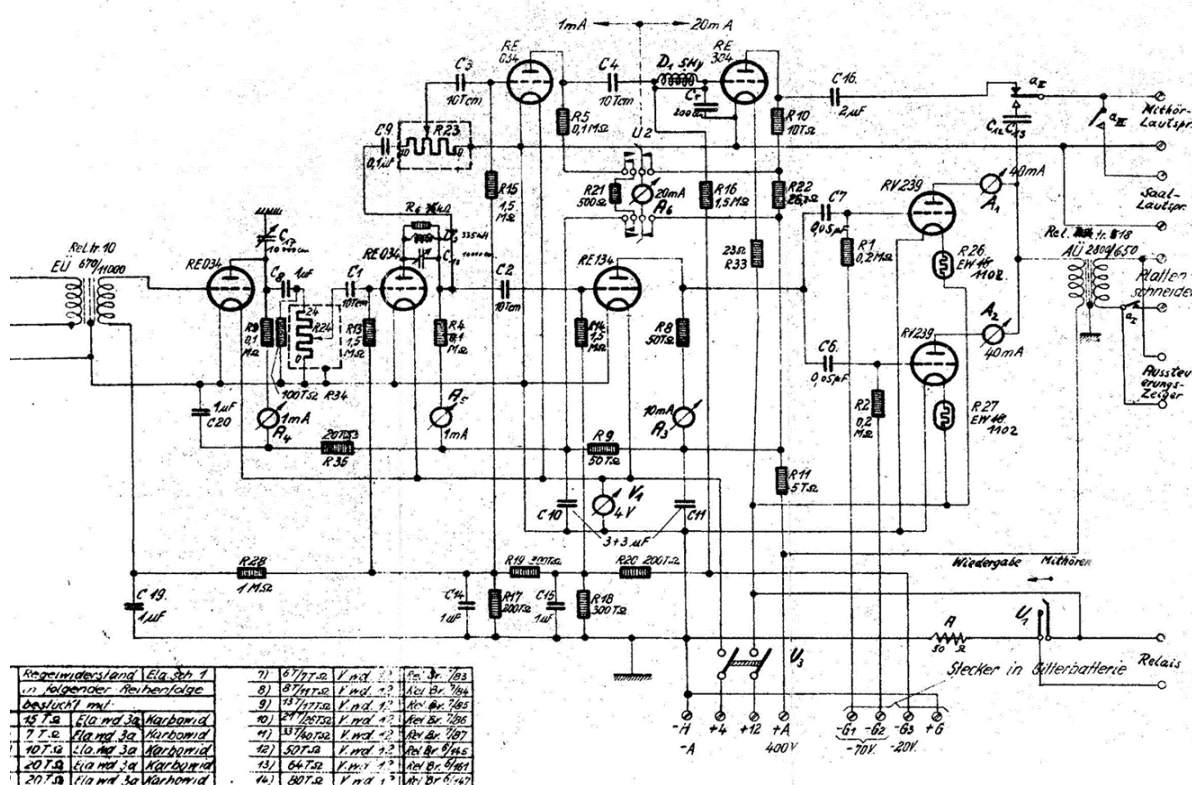
調整卓の下に置いて運用していました。テレフンケンのマイクは感度が高く出力 200 オーム(pin 5 と 6)で-30dB 近くありましたから、ミキシング回路は単なる抵抗器の組み合わせで済んでいたのです。しかし湿気に弱く、前述のようにノイズには毎回悩まされており、使用後は必ずデシケーター（乾燥器）に収めて保管していました。」

JAS：装置についてももう少し詳しくおしえてください。

「この写真はごく初期のカッターアンプで 1936 年にドイツから入ってきて 1 ～2 年運用しただけの物ですが、前段の真空管まで 7 本すべてのプレート電流を計るためにメーターがついていて、たった 2W のアンプが如何に特殊なものを窺い知る事ができます。しかし、すぐに交流電源専用の傍熱管による現代風のア



ンプに取って代わりました。なお、左に写っているのはテレフンケン(ノイマン社が製造)の M14
で、テレフンケンの録音システムではこれ以外は使っていませんでした。|



Elv.5613 型 2w Power-amp のダイアグラム



「増幅器やカッティングマシンの配置が判る写真で、左端がカッティング用アンプ群のラックです。撮影されたのはワックス盤カッティング最終期の 1953 年頃で、それ以降の原盤カットは SP も LP もラッカー盤になりました。二台のマシンは同時動作や単独で動作させることができ、クラシックなど長時間録音ではシリーズに連動も出来ました。また、ワックス録音の頃は未だテープレコーダーはありませんから、録音結果を試聴するにはワックス盤を再生して聴くしかなかったので付属の再生用のピックアップは柔らかいワックス盤専用にとってもコンプライアンスの高い専用の物でした。録音のときは先ずワックスに録ってそれを演奏者も一緒にみんなで聴き、確認したのちに本番をとります。勿論、本番の盤は傷がつくので聴くことはできません。ときにレベルが大きすぎて市販の蓄音機ではトレース不良の心配のある盤が発生したときは 直ちにワックス盤専用のピックアップで再生してもう 1 台のカッティングマシンで録り直すという非常手段もありました。」

次号に続く

菊田 俊雄氏プロフィール；

1949 年 キング音響(株)〔現 キングレコード〕録音課へ入社、録音部長を経て音響技術専門学校〔現音響芸術専門学校〕へ転職、教務部長から現在は理事で同校顧問。キングレコード在職中は クラシックからポピュラー音楽、演歌や純邦楽まで約 12,000 曲の録音に携わり、その間日本初の本格的なマルチチャンネル録音やコンピュータ制御のミキシング装置の導入を行う。またレコードの音質改善のために半速カッティングシステムなども積極的に構築した。

一方、レコード協会の技術部会長、AES 日本支部長(1990 年)なども歴任して、日本工業標準調査会の JIS 作成委員としては、ディスクレコード、テストレコード、カセットテープ、カートリッジテープ、マイクロホン、技術用語(録音再生)、磁気録音再生システム、コンパクトディスク (CD) 等の JIS 規格の作成にも携わった。

アナログレコード用ラッカー盤カッティング その2

JVC マスタリングセンター

見たい聞きたい行きたいレポート 照井 和彦 JAS 事務局長

昨年9月にはソニー・ミュージックスタジオ、ミキサーズラボ、そして日本コロムビアのカッティングマシンについてレポートしました。引き続きまして JVC ケンウッド・クリエイティブメディアのマシン、そして日夜カッティング作業を進めるエンジニアへのインタビューも併せてお伝え致します。

JVC マスタリングセンター

株式会社 JVC ケンウッド・クリエイティブメディアは代官山の静かな街並みの中に位置しており、今回の取材も大変楽しみにして最寄り駅から向かいました。

1927 年創業の日本ビクター蓄音機株式会社が SP レコードを生産開始し、横浜(子安・現在は JVC ケンウッドの本社ビル)に東洋一の蓄音機レコード工場を建設し、さらに 1958 年にはステレオ LP レコードの

製造を開始します。この LP レコードの生産が 1 億枚に達した 1972 年にビクターのレコード会社として分離独立したのが、アーティストとして桑田 佳祐、星野 源、柴咲 コウなどが所属する現在のビクターエンタテインメント(本社は渋谷区東)です。ビクターエンタテインメントも神宮前にスタジオ(通称青山スタジオ)を持っていますが、アナログレコードのカッティングは行って

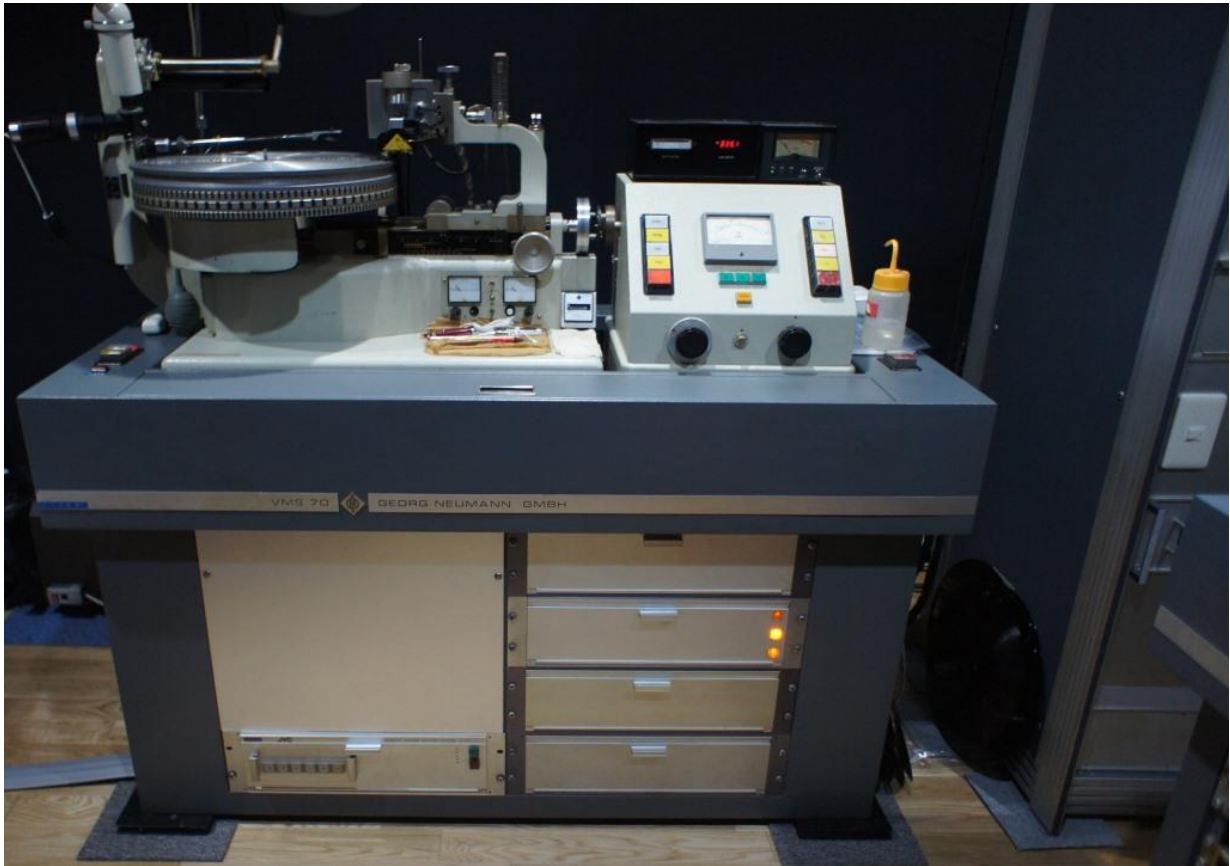


ません。

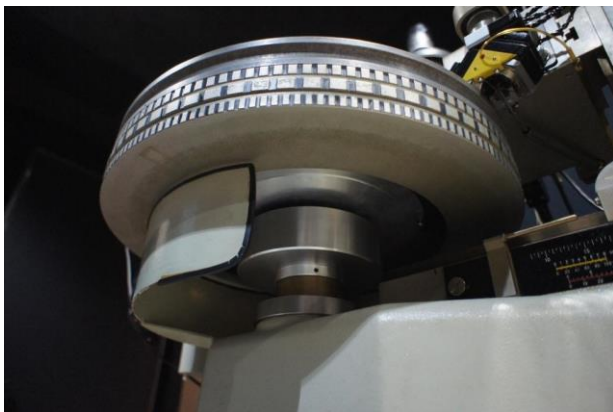
ビクター直系の JVC マスタリングセンターは 2007 年に日本ビクターから独立法人格としており、ここ代官山では三つのマスタリングスタジオとアナログカッティングルームを備え、国内にあるレコード各社からの業務を受託しています。



カッティングマシン



カッティングレースは NEUMANN 製の VMS70 でカッターヘッドは SX74 とおなじみの組み合わせです。ただしターンテーブルを駆動するモーターは、ビクター中央音響研究所製の強力なダイレクトドライブ方式に変更された特別仕様になっています。



(写真左) ターンテーブルを下から覗く (写真右) 本体内部に見えるモーターの下端部



(写真左) Electronic Package SAL74 (写真右) VMS70 上面の様子

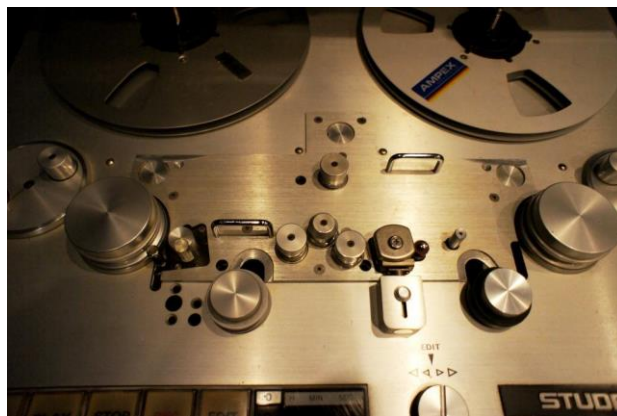
ターンテーブル奥には他と同様カッティングした後のラッカー盤モニター用のピックアップとアームも設置されていますがここ数年は使われておらず、また SAL74 も定期的なメンテナンスは施すが特別な改造などは入れず、稼働当初の仕様のままで保持しているとのことでした。



コンソール本体は NEUMANN 製で、右手には先行用リミッターや EQなどを配置し、右手にはカッティングレベル調整などのブロックが並びますが、インストールされている EQなどは一部を除き積極的に内製（ビクター特製）のものに交換運用しているとのこと。これはビクターのハード系経

営陣が視察時に海外製のエフェクター機器へ目が留まり、その時ビクター社としてのオリジナリティを打ち出すべしとの指示があり、機材社内製作促進とスタジオでの運用を改めて見直したとのことでした。

また現在カッターヘッドは SX74での運用ですが、ビクター中央音響研究所が過去に設計製造したヘッド CH90によって10年以上稼働していた実績がありました。



(写真左) 検聴室のテープレコーダーA80 (写真右) A80 のテープパス機構を見る



(写真左) A80 をドライブする reproducer 部 (写真右) STUDER A820



(写真左) 検聴用のコンソール (写真右) ラッカー盤の検聴にも用いるプレーヤー

検聴室も案内頂いたので写真でご披露しますが、言い換えると CD マスマスタリングルームでもあります。カッティングを済ませたラッカー盤の試聴にはもっぱらこの部屋を使っているとのことでした。

カッティングエンジニア 小鐵 徹さん



筆者が小鐵さんのお名前を初めて耳にしたのは、今は亡き伊藤 八十八プロデューサーのお話からで、ソニーとソニー・ミュージックがSA-CD（スーパーオーディオ CD）を世界に広めようという時期に、伊藤さんはその時 1 ビットデジタルマスター（DSD）からアナログ LP の製造も計画していました。と、取材にかこつけてそんなお話を小鐵さんに告げると、伊藤さんとは EW（イースト・ウィンド）のフォノグラム時代からのお付き合いとのことで、

ニューヨークのエンジニア、デビット・ベーカーの名前も飛び出して親交の深さを知ることができました。伊藤さんが小鐵さんのカッティングに立ち会う時にはカッターアンプを真空管式に指定し、カッターヘッドもウエストレックス等に交換するなど、こだわりを持って作業を見守っていたようです。

国鉄マンの父を持つ小鐵さんは反対を押し切って中学時代から好きだった音響の世界に飛び込みたいとオーディオテクニカに入社し、ここでは資材調達を担当して音響に近い仕事ではなかったものの、一年ちょっとの間に自分自身の青臭いところが抜けたと言います。そして朝日新聞にビクターのステレオやテレビ受像機の広告を見つけ、1967 年ビクターに中途入社します。試用期間中は鳥取営業所で商品の出し入れを黙々とこなし、ついに正社員に成るや営業所長に猛烈にアタックを開始して、その甲斐があり子安工場に異動できました。

カッティングエンジニアとして

そして 1973 年、小鐵さんは社内での聴感テストを受けて見事にスタジオ部門へ異動。6 年間の努力が実った瞬間でした。当時のアナログカッティングはレベル調整のみで、特に海外から送られて来たマスターテープは神様扱いとされており、音質をいじることはタブーとされていたとのことです。しかしここで洋楽の制作陣から問題が持ち上がります。



ニッパー君（ビクターエンタテインメント web より）

それは海外でプレスした LP レコード（外盤）と国内でカッティングからプレスまで施された国内制作盤の音の違いでした。どうも北米ではマスターテープの音を変えて化粧しているらしいという情報が伝わり、社内でもマスタリング（音の化粧）を始めなければいけない、という雰囲気醸造されていったそうです。しかしカッティング部門に来たものの先輩達の機材に手を触れるわけにもいかず、背中をじっとみつめるか、倉庫にマスターを取りに走るといった日々がしばらく続き、自分の部屋を与えられた時の喜びは今でもはっきりと覚えているそうです。

その頃の社内はカッティングマシンが9台9室の規模になっていました。そして小鐵さんは海外ポップスなど、エンジニアに人気のジャンルのみならず三味線など邦楽、長尺のクラシックスなども積極的に仕事をこなして、自分の引き出しを増やしていったそうです。若い人が、道草を食った、など言いますが、その道草のおかげで今では、何でもどんなことでも対処できる引き出しを沢山持っている小鐵さんは言います。



カッコ良い音に気付く

仕事が順調に進みだしても中古レコードを買いあさり、様々な音楽や音との出会いを求めていたある日、これは良い音だと思った音楽のマスタリングエンジニアが、当時 A&M 所属のバーニー グランドマンと気づきます。外盤と同じタイトルのマスターテープを聴き比べて（A/B 比較試験）違いが有りすぎて、特にドラムスのキックやベースサウンドには、すごいな！との感動で、これまでの自分の引き出しの中からマスタリングに挑戦し、だんだんとコツがつかめたとのことでした。

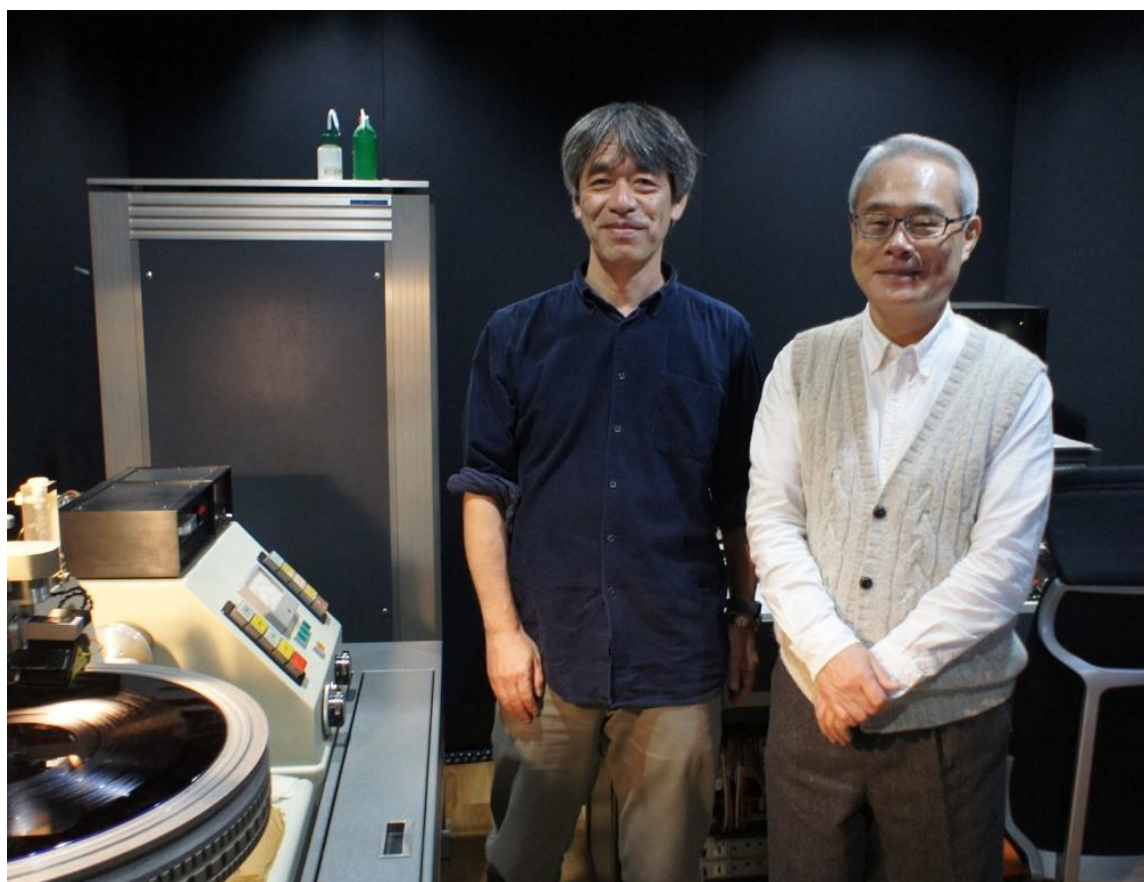
ブレイクしたのは RVC ビクターレーベルでの山下 達郎さんのアルバムを手掛けたことで、以降達郎さんのアルバムのようなサウンドで仕上げて欲しい、と業界ディレクターからの注文が殺到。また、サザンオールスターズの制作担当だった松元さんをお願いしその当時マスタリングを



海外に発注していた作業をぜひやらせてほしいと直訴し、ニューヨークのボブ ラディックのオフィスに行っているカッティング用アナログマスターテープを小鐵さんへ直送してもらい何度も挑戦。またダグ サックスなど小鐵さんから見ると殿上人とも言える偉人への挑戦は夜中に気を失いながらも作業をやり切り、ついに採用になったという教訓から、自分の器の中でベストを尽くせば良い、と気づきました。

CD マスタリングへの挑戦

1980年代になると、アナログレコードの生産が激減してCD時代に入っていきます。小鐵さんも二年間は仕事が無くなってしまい、上司からもアナログの栄光を捨てて一から出直すつもりでやれ、とハッパを掛けられて伝手をたよりに営業に回り、テープの編集などの仕事をもらって来ます。一時はさらに異動の話もあったようですが、クラウンレコード北島 三郎のCD マスタリングがきっかけで仕事も増えていき、ザ・イエローモンキーのベスト盤で低域のグルーブ感を全面に押し出したヒップホップサウンドに仕上げたことで、制作の宗清さんに大変喜ばれました。



(写真左から) 小澤 孝浩さん (マスタリングセンター長)、小鐵 徹さん

小鐵さんは、CD もアナログ LP もお化粧が大事、と言います。また、こだわりのインダストリアルアート。例えば先に写真で紹介した STUDER A80 のテープガイドの美しさなど、必然の美しさがあり、またカッティングレース VMS70 の横姿にもほれぼれするものがある。そういった思いを抱ける作業空間で毎日を過ごしている小鐵さんは大変うらやましいと、心から思いました。～EW の中古盤やイエモンのベスト盤探しに行かないと～！